

夏目漱石の漢詩

いしかわただひさ
石川忠久
(二松學舎大学顧問)

一
漱石の漢詩は、その五十年の生涯に見事に完結している。
およそ、漢詩を作ることを学ぶためには、次のような階梯
を踏まねばならない。

- (一)「七言絶句」から始める。「起承転結法」に習熟する。
- (二)対句の稽古をして「五言律詩」へ進む。
- (三)「七言律詩」へ進む。
- (四)「七言律詩」が十分に作れるようになったら、「免許皆
伝」。五・七言の「古詩」も自由に作れるようになる。
- (五)「五言絶句」は、以上の諸体が出来るようになった者が、
フトでき、または、フト作る。

漱石の場合、明治十四年(数え十五歳)、在学していた中学
(現日比谷高校の前身)を退学して、漢学塾二松学舎へ転入、
ほぼ一年在学したが、その当時の二松学舎のカリキュラムに
よると、

唐詩選・皇朝詩略・古文眞宝、復文(第三級第一課)、孟

子、史記・文章軌範・三体詩・論語(第二級第三課)
右の課程を履習した(傍線は詩に関するもの)ことがわかっ
ている。すなわち、作詩のための「基盤作り」がなされてお
り、先に示した階梯の(一)から(二)へ、の段階にあることが想定
される。そのころの作、とされる詩を見てみよう。

鴻台

鴻台冒曉訪禪扉	鴻台 こうだい 曉 あけ を冒 おか して禪扉 ぜんひ を訪ふ
孤磬沈沈斷続微	孤磬 こけい 沈沈 しんしん 斷続 だんぞく して微 かす かなり
一叩一推人不答	一叩 いっくわう 一推 いっすい 人不答 ひとこた へず
驚鴉撩乱掠門飛	驚鴉 きやうあ 撩乱 りょうらん として門 もん を掠 かす めて飛 と ぶ

(明治十六年〓十七歳)

鴻台は、こうのだい 国府台(下総国府の在所)の雅称である。

詩は、平仄の排列の規則にも適合し、早朝の寺院の雰囲気
もよく描けて破綻はない。後年の禅味も窺え、順調な「漢詩
人生」の第一歩が踏み出された。

二

明治十七年九月、無事、東京大学予備門（在学中に第一高等中学校と改称）に入學、ここで生涯の友、正岡子規と「運命的」に出会い、漱石の「漢詩人生」の第一段階は、完成する。当時の大学予備門は五年制であつたが、奇しくも、二人とも一年ずつ落第し（子規は一年生を二回、漱石は二年生を二回）、当初は出身地の違いから、同級生とはいへ、それほど親しくはなかつたが、二十二年、本科二年の五月、子規の「七軒集」をきつかけに、二人は強烈に牽かれ合い、漢詩の応酬も始まる。

やがて、漱石は大学本科英文科を明治二十六年に卒業、子規は国文科を中退し、明治二十八年、これも奇しくも、漱石は子規の母校、松山の中学校へ赴任することになって、二人は知り合つて以来始めて別れることになる。その際の互いの詩のやりとりを見よう。

三

送夏目漱石之伊予 正岡子規

夏目漱石の伊予に之くを送る

去矣三千里 去けや三千里

送君生暮寒 君を送れば暮寒生ず

空中懸大岳	空中大岳懸かり
海末起長瀾	海末長瀾起こらん
僻地交遊少	僻地交遊少に
狡児教化難	狡児教化難からん
清明期再会	清明期再会を期す
莫後晚花残	後るる莫かれ晩花の残るるに

形式は、五言律詩。寒・瀾・難・残と韻を押んでいる。「空中」の句と「海末」の句、「僻地」の句と「狡児」の句は、律詩の規則からそれぞれ対句になっている。

「去けや…」とは、物々しい出だしたが、唐詩の真似をしたもの。頷聯（三・四句）は、東京から汽車で西へ、途中富士山を眺め、神戸からは船で海を渡る。頷聯（五・六句）は、自分の郷里だから「僻地…」と言い、自分の出た中学だから生徒を「狡児（やんちゃな子ども）」と謙遜する。

これに対して、丁々発止、とばかり、漱石の返し歌。

無題

海南千里遠 海南千里遠く

欲別暮天寒 別れんと欲すれば暮天寒し

鉄笛吹紅雪 鉄笛紅雪を吹き

火輪沸紫瀾 火輪^{かりん}紫瀾^{しうらん}を沸^わかす

為君憂国易 君^{きみ}の為に国を憂^なうるは易く

作客到家難 客^{きやく}と作^なつて家に到^{いた}るは難し

三十異還坎 三十^{さん}異^ま還^{かん}た坎

功名夢半残 功名^{こうみき}夢^{ゆめ}半^{はん}ば残^えす

(明治二十九年一月十二日の書簡より)

子規の贈った詩と同じ韻字（寒・瀾・難・残）を用いて返した。これを次韻という。

「海南」は、四国が東京から見れば、海の南、に当るから、そういうのは自然なのだが、この語には、中国の詩の感覚からいえば、最果ての地、というイメージがまつわる。これが後半のマイナス・イメージ（三十にもなりながら功名は果たせず、故郷へも帰り難い）を呼び起こす働きをしていて、詩としては仲々うまいのであるが、相手の故里であり、しかも相手は自分を勞っている（子規の五六句）のに対して、いささかむき出しの哀傷、を詠う感が無きにも非ず。ただ、三・四句の汽車と汽船の旅の情景は、同じ題材を用いる曲の無さというマイナス面はあるものの、「鉄笛」「火輪」の無機質的な語に対するに「紅雪」「紫瀾」の語をもつてした、しかもそれには相手の故郷への道中をプラス・イメージで表現しよ

うとした配慮が窺われる……、というわけで、両者の贈答詩バトルは引き分け、というところか。

四

漱石は明治二十八年四月より一年間、松山中学校の英語教師を勤め、二十九年四月より三十三年七月まで熊本に在住、第五高等学校に勤務する。五高では、漢詩人長尾雨山と同僚になり、その懇切な添削指導を得て、漱石の漢詩は一段と上達した（深味を増した）ようである。この間に特筆すべきは、雨山の指導の下、五言古詩に挑戦し、詩境を上げたことである。例として五言十八句の「春興」があるが、割愛しよう。

熊本の四年三ヶ月は、漱石の漢詩人生において重要な意味を持つものであったが、ここで英国への二年間の留学から、帰国後の教職、それを退職しての文筆業と、丸十年の間は、漢詩の空白期となる。

明治四十三年七月、重篤な胃病により生死の関頭に立ち、昏睡より醒めた後、（十年間の空白の間に）貯えられたマグマが一気に噴出したかのように、漢詩が「復活」する。また、詩に添える墨絵の創作も始まる。

以下、大正五年の没時に到り、七言律詩の連作の爆発をもって、その漢詩人生は完結する。

漱石漢詩文年表

監修・齋藤希史

※漢詩の解説の末尾に記した番号は『漱石全集』第十八巻（岩波書店、一九九五）による。

第一期

～1894（明治27）年3月

《少年期から大学卒業まで》・満二七歳

おもに課題作文や友人との交流にともなう漢詩文が書かれていた。

五絶 3首 七絶 32首 五律 8首 七律 6首 五古 1首 七古 2首 合計 52首

一八八五
一八八八

「観菊花偶記」東京大学予備門予科三級在学中に提出された作文。

「七草集」評「正岡子規の詩文集『無何有洲 七草集』に加えた批評文。七言絶句九首を付す。『無何有洲』は「向島」のこと。（五月）

「木屑録」八月に友人とともに房総半島を旅行した時の紀行文。一四首の詩を含む。同年七月に兄と興津に旅行した時にも紀行文を書いていた。（九月）

一八九〇
「函山雑咏八首」箱根に旅行した時に作られた五言律詩。36～43。（八～九月）

第二期

1895年5月
～1900（明治33）年

《松山中学から第五高等学校を経て渡英まで》・満二八歳～三三歳

第五高等学校在籍中は同僚の漢学者長尾雨山（一八六四～一九四二）に詩の添削を受けていた。

五絶 6首 七絶 2首 五律 0首 七律 8首 五古 8首 七古 0首 合計 24首

一八九五
「無題五首」松山中学赴任時の七言律詩。子規に批正を求めている。53～57。（五月）

一八九八
「春興」「春日静坐」五言古詩。長尾雨山の添削がある。『草枕』では主人公の作として載せる。65～67。（三月）

一八九九
「古別離」「失題」五言古詩。第五高等学校校友会誌『龍南会雑誌』77号（一九〇〇・一二）に「古別離」「雑興」と題して載せる。長尾雨山の添削がある。71～72。（四月）

※『虞美人草』作中の五言絶句一首もこの時期に含めるが、作成年代は英国留学後の可能性がある。

空白期

1900～1910（明治43）年

《英国留学から小説家となるまで》・満三三～四三歳

一九〇〇年から一九〇三年までの英国留学（滞在中の一九〇二年九月に子規没）、第二高等学校講師着任の後、一九〇五年一月に「吾輩は猫である」を『ポトトギス』誌上に発表。以降、漱石は小説家の道を歩み、一九〇七年四月には朝日新聞社に入社して長編小説の執筆を仕事とする。

★小説

一九〇四
『吾輩は猫である』（『ポトトギス』一月）

一九〇五
『倫敦塔』（『帝國文学』一月）

一九〇六
『坊っちゃん』（『ポトトギス』四月）

『草枕』（『新小説』九月）

一九〇七
『虞美人草』（六～一〇月）

一九〇八
『夢十夜』（七～八月）

一九〇九
『三四郎』（九～十二月）

一九一〇
『それから』（六～一〇月）

一九一〇
『門』（三～六月）

第三期

1910 (明治43) 年7～10月

《修禪寺大患前後》・満四三歳

胃潰瘍による入院を機に再び詩を作り始める。とくに修禪寺大患後の作が多い。

一九一〇

〔無題〕「来宿山中寺」五言絶句。内幸町の長与胃腸病院を退院した日の詩。日記には「十年來詩を作つた事は殆どない。自分でも奇な感じがした。扇へ書いた」とある。77。(七月)

〔無題〕「秋風鳴万木」五言絶句。八月六日より療養のため修禪寺温泉に滞在していた漱石は、同月二十四日に大吐血し、人事不省に陥る。病後の詩のうち、最初の作。この時期の詩は『思い出す事など』に見える。78。(九月)

五絶 8首 七絶 5首 五律 1首 七律 2首 五古 1首 七古 0首 合計 17首

★小説・隨筆

一九一〇 『思い出す事など』(二〇月、一九二二年二月)

第四期

1912 年5月～1916 (大正5) 年春

《詩と画の世界》・満四五～四九歳

この時期の漱石は好んで南画を描くようになり、しばしば自ら詩を題した。また、人に求められて書いた作も少なくない。

一九一二

〔春日偶成十首〕五言絶句の連作。「日記」に書きつけられたもの。94～103。(五月)

〔酬横山画伯惠画〕横山大観の画に礼として書いた詩。五言律詩(108)と五言絶句(109)がある。(七月)

一九一四

〔題自画〕「山上有山路不通」七言絶句。自らの画に題した最初の詩。112。(二月)

〔題画〕七言絶句。自画「南山松竹図」に題した詩。この前後、七言もしくは五言絶句の題画詩が多い。119。(二月)

五絶 29首 七絶 10首 五律 1首 七律 0首 五古 0首 七古 0首 合計 40首

一九一二 『彼岸過迄』(二月～四月)

『行人』(二月～一九一三年四月)

一九一四 『こころ』(四～八月)

一九一五 『道草』(六～九月)

第五期

1916 (大正5) 年8月～11月20日

《『明暗』執筆期》・満四九歳

七言律詩を作ることを目課とし、生涯で最も集中して詩が作られた時期。

一九一六

〔無題〕「尋仙未向碧山行」七言絶句。八月二日付久米正雄・芥川龍之介宛書簡に見える詩。転句に「明暗双双三万字」とある。141。

〔無題〕「真蹤寂寞香難尋」七言律詩。一月二〇日夜の作。最後の詩となった。尾聯「眼耳双忘身亦失、空中独唱白雲吟」。208。一二月九日、漱石は亡くなる。

五絶 7首 七絶 2首 五律 0首 七律 65首 五古 0首 七古 1首 合計 75首

一九一六 『明暗』(五～十二月)

漱石における漢詩文——小説とのかかわりから

さいとう まれし
齋藤希史
(東京大学)

夏目漱石が漢詩文に深く親しんだ作家であることは常識の範疇に属するかもしれない。漢学塾であった二松学舎に学び、自らも「余は漢籍においてさほど根底ある学力あるにあらず、しかも余は充分これを味ひ得るものと自信す」(『文学論』序)と述べることからしても、漱石には漢文の素養があったと言われるのは当然ですらある。

とはいえ、漱石の文学全体において漢詩文がどのような意味をもったかについては、素養の一言ではすませられないところがある。ここでは、修辭と批評という切り口で小説とのかかわりを考えてみたい。

「別乾坤」の詩

漱石の漢詩文は、本誌別掲「漱石漢詩文年表」(以下「年表」)にあるように、中間に「空白期」がある。表裏をなすように小説家漱石はこの時期に出発し、専業作家への道を歩んだ。そしてこの時期のとりわけ前半の小説では、漢詩文の

世界を近代小説というジャンルにおいていかに活用するかを試みられていた。

まずそれは「別乾坤」(Ⅱ別世界)の象徴として用いられている。たとえば『草枕』(一九〇六)の有名な一節。

「……いくら傑作でも人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少からう。どこ迄も世間を出る事が出来ぬのが彼等の特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるから所謂詩歌の純粹なるものも此境を解脱する事を知らぬ。『……』うれしい事に東洋の詩歌はそこを解脱したのがある。採菊東籬下、悠然見南山。只それぎりの裏に暑苦しい世の中を丸で忘れた光景が出てくる。垣の向ふに隣りの娘が覗いてる訳でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる。独坐幽篁裏、弹琴復长嘯、深林人不知、明月来相照。只二十字のうちに優に別乾坤を建立して居る。『……』(『草枕』二)

「東洋の詩歌」としての漢詩は、「人事」や「西洋」と對置される。近代小説とも文明社会のあれこれとも對置される。漢詩は現代社会を相對化し、それを批評するためのものとして機能している。

この對比は、じつは明治以降になって初めて可能になったものであった。ここに挙げられた詩は陶淵明にせよ王維にせよ俗世を離れた境地を主題とするが、漢詩文はもちろん隱逸に尽きるわけではない。本来は政治や道德こそ漢詩文の専權であつた。漱石はそこに「西洋」という對比項をもちこむことで、漢詩を「東洋」のものとして位置づけなおし、「別乾坤」の詩に焦点を合わせる。それは現在を批評する視点となる。こうした文明批評の姿勢は漱石が評論や講演などでしばしば見せるものでもある。

『草枕』において作中の画工が漢詩を作る場面も同様である。人の気配から離れた部屋で、彼は「青春二三月」で始まる五言古詩を仕上げる。結びに「遐懷寄何処。緬邈白雲鄉」（遐懷、何処にか寄せん、緬邈たり白雲の郷）とあるように、やはり「別乾坤」の詩である。「寐ながら木瓜を觀て、世の中を忘れてる感じがよく出た」と自負する別の作中詩とあわせ、もとは漱石が第五高等学校在職中に作ったもので、その点からも、小説家以前の漱石が親しんでいた漢詩文の世界に多くを負っていることがわかる。

修辭の消費

こうした批評性は、『草枕』では漢詩そのものによつて示されると同時に、漢詩文に由来する修辭によつても裏打ちされている。そしてそれは俗世を離れた境地の修辭として用いられるだけではない。たとえば次のような一節。

暮れんとする春の色の、嬋媛として、しばらくは冥邈の戸口をまぼろしに彩どる中に、眼も醒むる程の帶地は金欄か。あざやかなる織物は往きつ、戻りつ蒼然たる夕べのなかにつゝ、まれて、幽閑のあなた、遼遠のかしこへ一分毎に消えて去る。[…]

（「草枕」六）

『草枕』のヒロインである那美の形容であり、これもまた伝統的な漢文脈の修辭を繼承するかに見えるのだが、ここで那美は、先の「青春二三月」の詩の直後、「序でだから、もう一首作つて見やうかと、鉛筆を握つたまま、何の気もなしに、入口の方を見ると」というところで登場する。漢文脈のコードから言えば、隱逸と美女はそれぞれ別の世界のもので、交錯して現れることはない。漱石は近代小説という仕組みによつてそれらを連続させ、独自の世界を描こうとする。たんに「別乾坤」の批評性を確保するためにのみ漢詩文が用いられているのではなく、近代小説による新たな表現世界を成り立たせるための修辭としてその資源が最大限に用いられてい

る。そして美女の修辭は、『虞美人草』（二九〇七）においてさらに徹底される。

同時に、『虞美人草』の修辭を仔細に検討すれば、この小説は漢文脈を利用しつつ、それを限界までつきつめ、その無効性へと踏み出そうとするものであることが見えてくる。美文をまとったヒロイン藤尾の死によって小説が結末を迎えることは、いわばその象徴である。

そして『三四郎』（一九〇八）以降、漱石の小説の主人公はもはや漢詩文の修辭をまとうことなく、その世界とは距離を置くことを示すようになる。たとえば『門』（二九一〇）において宗助が歯医者者の待合室で雑誌『成功』を目にする場面

「……夫には風碧落を吹いて浮雲尽き、月東山に上つて玉一団とあつた。宗助は詩とか歌とかいふものには、元から餘り興味を持たない男であつたが、どう云ふ訳か此二句を読んだ時に大変感心した。〔門〕五の二」

漢詩文の世界は、どこか遠くにあるものとして憧憬の情を呼び起こすけれども、親しいものではすでない。

総じて、漢詩文の修辭性は、美文の資源としての利用からその限界への試行を経て小説の表面から姿を消し、一方、その批評性は主人公自身が有するものから主人公の外にあるものへとなつていったとまとめられようか。前期までに蓄えら

れた漢詩文の資源は、この時期におおむね消費つくされたと見ることもできる。

詩作の再開

漱石が漢詩を再び作る事になつたきっかけは、自身の病氣であつた。内幸町の長与胃腸病院を退院した明治四三年（二九一〇）七月三十一日の日記には、十年ぶりに作つた詩が記される。「来宿山中寺、更加老衲衣、寂然禅夢底、窓外白雲帰」（来たり宿る山中の寺、更に加う老衲の衣、寂然たる禅夢の底、窓外白雲帰る）。『草枕』の詩にもあつたように「白雲」は漱石の好んだ脱俗の表象である。そして同年八月の修禅寺の大患の後、詩作の量は一氣に増える。

「……病氣の時には自分が一步現実の世を離れた氣になる。他も自分を一步社会から遠ざかつた様に見て呉れる。此方には一人前働かなくても済むといふ安心が出来、向ふにも一人前として取り扱ふのが氣の毒だという遠慮がある。さうして健康の時にはとても望めない長閑かな春が其間から湧いて出る。此安らかな心が即ちわが句、わが詩である。（思ひ出す事など）五」

病中であることが彼の「別乾坤」を保証し、俳句と漢詩の制作を促した。小説執筆からの強制的な切断によつて、再び「長閑かな春」がやってきたのである。

以降、漱石は自らの習慣として詩を作り始める。「年表」第四期は、漱石が描いた南画に自ら題した詩も多く、小説とは別の世界を構成する創作行為の一環として画や詩があったことがうかがえる。総じて、『行人』（一九一二～三）や『心』（一九一四）など、小説においては人ととの関係における心理の複雑さを細かに描きつつ、漢詩においてはそれとは異なる世界を作ろうとしたのである。漢詩はしばしば社交のために作られ、森鷗外なども例にもれないが、漱石の詩はそうではない。それは言わば療養の空間であり、漢詩文が現代社会に対して持ち得る批評性は、むしろ療養の空間を支えるものとして機能し、修辭はその空間のために用いられた。

表現の存立へ

だが漱石における漢詩は、結局、療養のためにのみあったのではなかった。そのことは第五期、すなわち『明暗』（一九一六）執筆期においてより鮮明になる。七言律詩の制作を日課としたこともかわるのであるが、漢詩という表現手段において何が可能なのかという追求が行われる。「啐啄」「水月」さらに「抱月投炉」など、禪語ないし禪語にならった措辭が以前にも増して顕著になるのもその一つの現れであろう。禪語は、ことばとそれが指し示すものとの間とを故意に引き裂き、常識にとらわれない思考を導こうとする。

安定した修辭によつてではなく、表現そのものの存立を問い直す行為として詩作が行われる。のこされた推敲の跡のおびただしさも、それを物語る。

それはちょうど漱石の小説において、相手のことばをそのままには受けとらずに本心を探ろうとし、また自らも本心を隠すためのことばを発し、互いに何が本心なのかすらあやふやになっていくさまを細かに描くことと通底しているように思われる。『明暗』はまさにそのような小説として批評性をもつが、同時期に書かれていた詩もまた、ことばの真实性、表現の存立の根拠を問う批評性を有している。「東洋」から「西洋」を批評するというような枠組みの先へと進んでいる。

漱石の詩は小説とのかかわりを再び編み直したのであった。漢詩文を修辭と批評の資源としてそのまま利用した以前のありかたとは異なり、二十世紀に生きる者の表現としての可能性が、小説と連動して試みられる。小説執筆によつて「大いに俗了された心持」（久米正雄・芥川龍之介宛書簡）を洗い流すために作られたかに見えて、じつは、小説とともに、ことばの真实性とは何かという課題に向き合っていた。私たちはそのことに気づかねばなるまい。

注（一）以下、引用は『漱石全集』（岩波書店、一九九三年版）の該当巻に拠る。

（二）小稿「虞美人草——修辭の彼方」（『叙説』三八、二〇一一）参照。

【授業実践】対決！ 正岡子規対夏目漱石

——漢詩応酬による交遊をめぐって語る

まつおか
とわおる
松岡 徹

(愛媛県立松山東高等学校)

*所属は執筆時

1 はじめに

夏目漱石『坊っちゃん』に「四国辺のある中学校」とあるのは本校がモデルであり、子規や虚子など、多数の俳人が本校で学んだ。松山市で始められた「俳句甲子園」も二〇年目を迎える。このような環境に恵まれているので、本校は、国語教育にはアドバンテージがあると考えている。

松山では子規と漱石の交遊の証拠として俳句の応酬が有名であるが、二人の漢詩についてはあまりふれられていない。今年、二人が生まれて一五〇年を迎え、来年、本校は創立一四〇周年を迎える。そこで、この記念すべき年にかつての「狡児^{こうじ}」(後出)が現在の「狡児」に授業をすることとする。

2 対決！ 子規対漱石^(注1)

(1)「比べ読み」で何が変わるか

「俳句甲子園」は、平安時代の「歌合」を俳句に応用したもので、紅白のグループにわかれ、作品の披露と質疑応答を

行い、最後に審査員の採点により勝敗が決まる。今回はそのルールを応用して授業で「漢詩甲子園」を実践する。生徒たちはすでに「俳句甲子園」を体験しており、表現の特徴や作者の意図についてオリジナルな意見で「批評」することによって思考力・判断力・表現力が高まるのである。そこで評価は鑑賞文「子規と漱石の漢詩の共通点、相違点」について以下のとおり分析することとする。(B)が評価規準である。

「おおむね満足できる」状況(B)

比べ読みを通して、子規と漱石の思想や感情などがどのように漢詩として表現されているかを捉え、巧みな表現、繊細な表現、簡潔な語調などを考察している。

「十分満足できる」状況(A)

我が国の言語・文学・思想などは、特に中国から強い影響を受けてつ独自の発展を遂げてきたことについて理解しようとしている。

「努力を要する」状況(C)への手立て

子規と漱石の漢詩の尾連を比較させることにより、二人の思想や感情などがどのように漢詩として表現されているかを捉えさせる。

以下は、調べ学習に基づく生徒独自の解釈である。

(2) 正岡子規の漢詩を鑑賞する

送^{スル}夏^ニ目^ニ漱^ノ石^ヲ之^ニ伊^ニ予^ニ 正岡子規

去^{ケヨ}矣^ニ三千里 送^{レバ}君^ヲ生^ズ暮^ニ寒^ニ
空^ニ中^ニ懸^{カリ}二大岳^一 海^ニ末^ニ起^ル長^ニ瀾^ニ
僻^ニ地^ニ交^ニ遊^ニ少^ニ 狡^ニ兒^ニ教^ニ化^ニ難^ニ
清^ニ明^ニ期^ニ再^ニ會^ニ 莫^{カレ}後^ニ晚^ニ花^ニ残^ニ

〔首聯〕雄大である。伊予に行く漱石を力強く後押しをしている。
『万葉集』額田王の歌「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかな
ひぬ今は漕ぎ出でな」を連想させる。

〔頷聯〕対句が巧みである。「大岳」とは富士山である。子規の俳
句に「寒けれど富士見る旅はうらやまし」とある。東京から松山
までの当時の道中が目には浮かぶ。まさに「写生」だ。

〔頸聯〕対句を用いて、松山を客観的に自虐的に表現している。
「愚陀^{ぐだ}仏庵^{ぶつあん}」（漱石の松山での下宿）で過ごした日々を思い出し、
懐かしんでいる。「狡^こ児^ご」とは（私たちにとつては）大先輩のこ
とだが、『坊っちゃん』に出てくる生徒を想像してしまう。私た
ちも教員から見ると「狡児」なのかもしれない。

〔尾聯〕春休みには会いたいという友情、漱石との再会を生きる
糧にしたいという思いが強く表れている。別れの悲しみよりも再
会の楽しみが強く表現されている。

(3) 夏目漱石の漢詩を鑑賞する^(注2)

送^{スル}別^ニの詩^ヲ拜^シ誦^ス 後^{ちう}聯^と尤^も生^にに適^て切^く 乍^さ粗^{まつ}末^つ次^{ながら}韻^を却^が呈^す

夏目漱石

海^ニ南^ニ千^ニ里^ニ遠^ニ 欲^{シテ}別^レ暮^ニ天^ニ寒^ニ
鉄^ニ笛^ニ吹^キ紅^ニ雪^ニ 火^ニ輪^ニ沸^カ紫^ニ瀾^ニ
為^ニ君^ニ憂^{フル}ハ 作^{リテ}客^ニ到^ル家^ニ難^ニ
三^ニ十^ニ異^ニ還^ニ坎^ニ 功^ニ名^ニ夢^ニ半^ニ残^ニ

〔首聯〕子規の首聯に呼応している。「海南」とは南海道のこと。
（愛媛新聞は昔、海南新聞といった。）子規と別れる寂しさが夕暮
れの寒さとともに身にこたえて耐えがたいということだろう。

〔頷聯〕「鉄笛」は東海道を走る汽車、「火輪」は瀬戸内海を走る
蒸気船。「紅雪」「紫瀾」と表現し色彩感覚豊かで、比喩を巧みに
用いていることなど、後に小説家となることを彷彿とさせる。

〔頸聯〕漱石の教養が溢れている。対句と考えると「君と為りて
国を憂ふるは易く 客と作りて家に到るは難し」と訓読するのが
よい。富国強兵につきすすむ日本を考えるのは簡単であるが、流
浪の旅人となつて、人生の目的地に到達するのは難しいといつて
いるのであろう。

〔尾聯〕『易』の言葉を用いて「僻地」に行き苦勞ばかりしている
自分に比べて、子規は大好きな俳句や短歌に没頭できることをう
らやましく思っている。ここに、後に漱石が『こころ』や『明
暗』で描いた「知識人の孤独な内面」が現れているように感じる。

(4) 漢詩甲子園(漢詩の解釈をもとにディベートを行う)

「チーム子規の意見」

①子規の漢詩は起承転結がはっきりとしている。特に漱石が「後聯尤も生に適切」と書くように「僻地交遊少 狡兎教化難」の「転」が効いている。

②冬から春への時間の流れと東京から松山への空間の流れとが「写生」されている。子規の俳句と同様、心象風景がすばらしい。

③「空中」「大岳」「海末」「長瀾」は青を連想させ寒色である。それに對して尾聯では「清明」「晩花」など暖色で表現しており、生命への希望を感じる。

④この時の子規の興奮ぶりが「漱石が来て虚子が来て大三十日」という俳句とともに鮮明に浮かぶ。

「チーム漱石の意見」

①次韻が巧み。「寒・瀾」については子規の漢詩に呼応しているだけだが、「難・残」については漱石の心情を強く詠み込んでいる。次韻するだけでなく、漱石オリジナルな漢詩になっている。

②頸聯は魏の曹植の漢詩「怨歌行」や『論語』子路編に影響を受けているらしい。漱石の漢学に対する教養の高さが伺える。

③明治二八年はターニングポイントである。漱石は「僻地」愛媛県尋常中学校の嘱託教員となる。また翌年一月三日の子規庵の「句会初」には、中根鏡子との見合いのために上京した漱石と軍医学校長森鷗外が集っている。^(注1)

④「功名夢」とはグローバルに生きることではないか。私たちが「スーパードググローバルハイスクール事業」に取り組んでいることと同じではないか。私は海外フィールドワークで研修した。漱石も子規も海外に留学し、官僚として日本を支えることを目指していたのではないか。

3 まとめ

本実践は、子規と漱石の漢詩を比べ読みすることによって「グローバルとは何か」という命題に迫ろうとするものである。したがって少なくとも本校ゆかりの「知の巨人」にふれあうことによって文化の伝承者・創造者としての関心を高めることができたのではないか。さらに先人の志を振り返り、スクールアイデンティティを醸成できたのではないかと自負している。

●参考文献(以下の著作なくして本実践はない)

(注1) 笠井幸博「対決！李白対杜甫―主体的に漢詩に関わっていく授業を目指して―」(大平浩哉編著『国語総合』授業の工夫20選)所収 大修館書店

100頁

(注2) 徐前「漱石と子規の漢詩―対比の視点から―」(明治書院 2005)

(注3) 愛媛県高等学校教育研究会国語部会『高校生のための愛媛の文学』(森と出版 2009)

【授業実践】漱石「自画に題す」を使った「韻塞ぎ」

岡本利昭
（おかもととしあき）
（神戸大学附属中等教育学校）

一、はじめに

平安時代の文学には漢学を取り入れた「ことば遊び」がよく登場する。「韻塞（いんふた）ぎ」（韻を隠しておいて押韻された字をあてる）もその一つである。

だが、古典文学にしばしば登場する優雅な「ことば遊び」を授業で取り上げることがほとんどない。その理由は、教える側に言葉遊びに関する理解が不足していること、また、漢文、特に作詩法に関する理解不足があげられよう。今回は中・高の教室でも比較的、実施がしやすい「韻塞ぎ」を漱石の「題「自画」」を使って実践した報告をしたい。

二、『源氏物語』における「韻塞ぎ」

『源氏物語』賢木（さかき）の巻では、巻の後半に「韻塞ぎ」が見える。父桐壺院が崩御し、密かに想い続けていた藤壺まで出家し、後ろ盾を失った光源氏は政界に身の置き所がないままに、頭中將らと韻塞ぎをして気を紛らわせている、という部

分がある。本文を引用する。

またいたづらに、いとまありげなる博士ども召し集めて、文つくり、韻ふたぎなどよのすさびわざどもをもしなど、心をやりて、（中略）殿上人も大学のも、いと多う集ひて、左右にこまどりに方分かせたまへり。賭物どもなど、いと二なくて、挑みあへり。塞ぎもて行くままに、難き韻の文字どもいと多くて、おぼえある博士どもなどの惑ふところどころを、時々うちのたまふさま、いとこよなき御才のほどなり。

（『源氏物語』賢木）

韻塞ぎについて玉上琢也氏は次のように評している。

「韻ふたぎ」は、平安朝のころ盛んに行われた遊びである。その知的なところが好まれたのであらう。古い詩集などから詩をとりあげて、その韻字の部分の隠しておき、そこが何という字であるかあてくらべをする。たとえば、「蝸牛角上争何事 石火光中寄此園 随富随貧且歡樂

不開口笑是痴[□]（白楽天 対酒）の□で囲んだ字を隠して、あてさせる。というふうなものであるらしい。（中略）韻ふたぎは、漢字に長じ、わけても詩に精しくなければならぬが、単にそれだけでは足りない。なにぶんにも、今まで見たこともないような詩のだされることもあるから、韻字を推定しようとする、文学的才能もなければできない。

（玉上琢也「源氏物語評釈」賢木）

十一世紀初頭の平安時代であるから、韻塞ぎに用いられたのは、玉上氏が例に挙げているように『白氏文集』の詩がまず考えられる。だが白楽天の詩は先にあげた「対酒」でも見られるように起句が「踏み落とし」の詩も多く（二説には白楽天の作のおよそ半数）、教室で韻塞ぎに使うのはあまり適当ではないだろう。そこで、夏目漱石「題「自画」」を韻塞ぎの教材に用いてみた。その理由は、まず、漱石の詩は韻がきわめて正確なこと。次に、平安朝の日本人が楽しんだ遊びであるのだから、「韻塞ぎ」をするなら日本漢文を素材にしたと思うからだ。さらに、この漱石の詩は、詩題が示すように、「自画自賛」された詩であるという点である。生徒は韻塞ぎを行う際、詩だけでなく、漱石の自画も参考にできるという利点がある。絵（非連続型テキスト）も参考に漱石の創作意図を「読み」ながら、詩の韻を考えerというのは、PISA型学力育成型の実践ともなっている。

三、授業の実際

漱石「題「自画」」を使った韻塞ぎ（対象中学二年生・計二時間）

唐詩読罷倚闌干	唐詩を読み罷めて闌干に倚れば
午院沈沈緑意□	午院 沈沈として緑意□
借問春風何処有	借問す 春風何れの処にか有ると
石前幽竹石間□	石前の幽竹 石間の□

右のように承句、結句末の韻字を伏せて詩を生徒に示し、書き下し、現代語訳の後、韻を考えさせた。

まず生徒は、七言絶句であるので、起句末も押韻することを手掛かりに「干」の字を漢和辞典（本校は『新漢語林』を全員が持つている）で引き、漱石のこの詩が上平声「寒」韻（十四寒）の韻目で押韻されていることを確認する。次に「平仄辞典」を配布し、寒韻の韻字表から主な字を確認する。平仄辞典がクラス全員分確保できない学校では、韻字表をプリントして配布すればよいだろう。

生徒からは、承句末は「丹、簾」などの意見が出たが、転句をよく読み、「春風がどこにある」と思うときは、どのようなときかを考えるように指示すると、「寒」という意見が比較的早く複数の生徒から出てきた。空白を埋めようと思えば、表現されている部分をより注意深く読み、漱石の創作意図を汲まなくてはいけないのである。ただ、結句末は「植物

であろう」という予想はできるものの、「蘭、^{らん}、^{らん}、^{らん}（むくろじ・おうち）」などの意見が出て決め手がなかった。（しばしば画題となった四君子（蘭・菊・梅・竹）の知識があれば容易かもしれないが。）

今回の実践では、比較の意味で漱石の絵（竹石図詩賛）を『図説漱石大観』からスクリーンで大きく見せたクラスと見せていないクラスを作ったが、絵を示したクラスでは「蘭」の字を入れられた生徒の数が非常に多かった。



（夏目漱石筆・「竹石図詩賛」）

「^{らん}（むくろじ・おうち）」は高木であるが、漱石の絵を見る限り、石間の草は大きな植物には見えない。絵も示しながら韻塞ぎをすることが有効であると感じた。

四、おわりに

入試でも詩の問題は、必ずと言っていいほど詩の句末に空欄を設け、韻字を選択肢から入れさせていないだろうか。これは、私に言わせれば韻塞ぎに他ならない。だが、選択肢の

韻字が、例えばセンター試験（平成一九年度本試、二六年度追試）でも、明らかに違う韻目の字が、五つの選択肢の三字を占めており、結局は二択の問題のようになってしまっている。詩の韻字を答える問題は、本来は読解力を見るためのものだったはずが、現場では「音読みして似た母音の入っている字を入れなさい」といった機械的な指導（受験テクニック）に墮してしまっていないだろうか。センター試験の韻字を入れる問題でも、韻目が同じ字を五つ選択肢に並べれば、相当、読解力が必要になるし、現に正答率が低い年度（平成一五年度本試、一九年度本試）の問題は、作者の創作意図や表現の工夫を、書かれてある部分を注意深く読み取らないと正解にはたどり着けないようになっていいる。対句や句中対の知識も必要なときが多い。

空白（韻字）を補うためには、生徒たちは、詩を読む中で作者の創作意図や表現の工夫を考えながら空白を補わなくてはならない。このように、読みを深める手段の一つとして、韻塞ぎは優れている。平仄の知識も必要ない。

そして何より漱石の詩が韻塞ぎの題材として好適なのは、「^ス題三自画二」という作品が今回扱った作以外にもたくさんあることである。詩そのものの良さはもちろんだが、「画」も利用できるため、教材としても極めて価値が高い。

漱石漢詩と日本漢詩文を知るためのブックガイド

あべかずまさ
阿部和正
(二松学舎大学)

* 版を変えているものは、最新のものを示した。

* なるべく手に入りやすいものに絞って採録し、著者の重複も避けた。

■漱石漢詩の注釈書

それぞれ一長一短があり、語釈や解釈が大きく異なっている場合もあるため、何冊かを見比べながら使用すると効果的。

○松岡譲『漱石の漢詩』朝日新聞社 一九六

漱石が作った漢詩を、漱石自身の体験と結びつけることに主眼が置かれた注釈書。

○竹盛英雄編『別冊国文学 夏目漱石必携Ⅱ』学燈社 一九三

「漱石漢詩事典」が収録されており、それまでの注釈書の問題点も指摘されている。

○中村宏『漱石漢詩の世界』第一書房 一九三

「参考」という項が、漱石の詩の独自性を説くだけでなく、漢詩を作る上でのルールなども解説している。

○佐古純一郎『漱石詩集全釈』二松学舎大学出版部 一九三

「語釈」や「通釈」に加え、その漢詩をより深く理解する手助けとなる「補説」が付されている。

○高木文雄『漱石漢詩研究資料集―用字・訓讀校合』名古屋大学出版会 一九七

漱石漢詩のなかで使われている言葉の使用頻度や使用された時期を調査した注釈書。

○吉川幸次郎『漱石詩注』岩波文庫 二〇〇三

現在最も参考に使われている注釈書であり、注釈書選びに迷った場合は、この書から始めてみるのがよい。

○飯田利行『新訳 漱石詩集』柏書房 一九五

著者独特の解釈に陥っているきらひはあるが、「新釈」として一つの参考にはなる。

○一海知義訳注『漱石全集 第十八巻 漢詩文』岩波書店 一九五

語注の参考として目を通しておきたい。『漱石と河上肇―日本の二大漢詩人』(藤

原書店 一九九六)には、注釈を付けた際のこぼれ話が収められている。

■漱石漢詩をより知るために

漱石が漢詩を作った背景などを考察した書を選んだ。

○渡辺昇一『教養の伝統について』講談社学術文庫 一九七

晩年に作った漢詩や傾倒した詩から、幼少期の漱石の姿を垣間見ようとした「白雲郷と色相世界」は一読の価値あり。

○斎藤順二『夏目漱石漢詩考』教育出版センター 一九四

漱石の生き方や小説のなかに漢詩がどのようにに影響していたかを探っている。

○清水茂『語りの文学』筑摩書房 一九六

「夏目漱石と漢文学」の章で、漱石にとっての漢詩について論じている。

○石川忠久『日本人の漢詩―風雅の過去へ』大修館書店 二〇〇三

「第二十三章 子規・漱石房総の旅」で、子規と漱石が作った漢詩の内容や形式の類似と差異について言及している。

○加藤二郎『漱石と漢詩―近代への視線』翰林書房 二〇〇四

漱石にとっての「近代」を、漢詩を読み

解くことで明らかにしようと試みた書。

○古井由吉『漱石の漢詩を読む』岩波書店 二〇〇八

「修善寺の大患」後の漱石の漢詩に、漱石の死生観が表れているとする講義録。

○和田利男『漱石の漢詩』文春学藝ライブラリー 二〇〇六

陶淵明や杜甫などから漱石が受けた影響を論じた第二部はこれからの研究に大いに参考になる。

■漱石をより知るために

——「文豪 夏目漱石」とは違った角度から漱石を論じている書をあげた。

○夏目鏡子述、松岡譲筆録『漱石の思い出』文春文庫 一九九四

妻から見た漱石の姿が記される。「文豪漱石」とは違った一面が垣間見える。

○江藤淳『漱石とその時代 第一部』第五部『新潮選書 一九七〇—一九九〇』新潮選書 一九七〇

漱石だけでなく、明治という時代を知ることができる有意義な書。

○石原千秋『漱石はどう読まれてきたか』新潮選書 二〇一〇

漱石の小説がどのように読まれてきたかを大まかに概括した書。伝記的事実に囚われ

ない小説の読み方を知ることができる。

○十川信介編『漱石追想』岩波文庫 二〇〇六
生前の漱石を知る者たちの証言を集めたアンソロジー本。

○小森陽一『漱石を読みなおす』岩波現代文庫 二〇〇六

明治という時代のなかに漱石を置くことで、漱石を捉え直した書。

■日本漢詩文を別の角度から眺めるために
——近代という時代のなかで漢詩を捉え直すとしていた書を選んだ。

○入谷仙介『新版 近代文学としての明治漢詩』研文出版 二〇〇六

近代の知識人にとって漢詩がなぜ必要であったのかを論じると同時に、なぜ必要とされなくなっていくのかを論じている。

○合山林太郎『幕末・明治期における日本漢詩文』和泉書院 二〇一四

時代の影響を強く受けた漢詩文が、立場や立ち位置を変化させていく過程を論じている。

○齋藤希史『漢文脈と近代日本』角川ソフィア文庫 二〇一四

漢詩や漢文が、近代日本における文体や文学の成立にどのような影響を与えたのかを論じる。

かを論じる。

○木下彪『明治詩話』岩波文庫 二〇一五

明治から昭和を生きた漢学者である木下彪が、社会や文壇の変化について記したもの。

■高校生のために

○高島俊男『漱石の夏やすみ』ちくま文庫 二〇〇七

漱石が大学時代に書いた『木屑録』という紀行文を解説した書。

○森岡ゆかり『文豪だって漢詩をよんだ』新典社新書 二〇〇九

文豪たちが漢詩とどのように付き合っていたのかを論じている。同著者の『文豪の漢文旅日記—鷗外の渡欧、漱石の房総』（新典社選書 二〇一五）も平易で読みやすい。

○一海知義『漢詩入門』岩波ジュニア新書 一九九八

漢詩がどのようなリズムで成り立っているのかを、具体的な漢詩の例を示しながら解説する。

○鈴木健一『日本漢詩への招待』東京堂出版 二〇一三

奈良時代から明治時代までの日本漢詩の変遷を追った書。日本漢詩の大まかな流れを掴むことができる。

◎待望の事典、遂に刊行！

『三国志事典』

人物紹介、名場面、三国時代の歴史・文化・
国際関係……『三国志』を読むために必要な情報を
網羅。正史『三国志』に基づく初めての事典。



渡邊義浩 [著]

A5判・上製・388頁
定価＝本体3,600円＋税

◎主要目次

第一章 正史『三国志』

陳寿の生涯／正史『三国志』の成立／裴松之注／『後漢書』につ
いて／『晉書』について／三国時代とは／『三国志』物語の派生

第二章

魏の歴史と人物

第三章

蜀の歴史と人物

第四章

呉の歴史と人物

第五章

後漢書・晉書の人物

第六章

名場面四十選

第七章

①乱世の姦雄／②鞭打つ劉備／③孫堅の神秘的出生／④董卓専横／
⑤曹操の大義／⑥孫堅と袁術／⑦天下の英雄は君と私である／……

第八章

思想と文学

第九章

儒教一尊から四学三教へ

第十章

魏志倭人伝と国際関係

第十一章

『魏志倭人伝』を生んだ国際関係／『魏志倭人伝』に見える倭国の虚と実

第十二章

資料集

第十三章

各時代の勢力全体図／三国年表／官職一覧／裴松之注引用書一
覧／基本用語辞典

第十四章

人名索引・事項索引

▼正史『三国志』の成立過
程やその背景、著者・注
釈者について詳述、さら
に、『三国志演義』に至る
『三国志』物語の派生・展
開について解説しました。

▼魏・蜀・呉、それぞれの
歴史概略を示し、各国内
の動向を大づかみできる
ようにしました。さらに
『三国志』に本紀・列伝が
立てられている全人物に
ついて項目を立てて記述
しました。

▼三国時代の各国の外交政
策について記し、『三国
志』巻三十一「鮮卑・烏
桓・東夷伝」の倭人の条
(通称、「魏志倭人伝」)に
ついて、原文を解説しつ
つ、邪馬台国の実像に迫
りました。

▼三国志に描かれた各時代
の中国全体図を収録。そ
の時々々の勢力関係が一目
でわかります。



◎著者のことば



(撮影：菅田純一)

三国志の事典を出版したいという思いは、昔から抱いていました。『三国志研究要覧』を出版した一九九六年、『三国志研究入門』を出版した二〇〇七年には、とくに強く思いました。この『三国志事典』を刊行するのが、二〇一七年ですから、すでに二〇年も経ってしまったことになります。

出版に踏み切れなかったのは、「事典」という言葉の持つ客観性にあります。ご承知のとおり、『三国志』、とりわけ「魏志倭人伝」は異説の多い学問分野です。議論百出の中に客観的に「正しい」事典を執筆する、という行為にたじろいでいた訳です。二〇〇一年から出版を始めた『全譯後漢書』（全十九巻）は、二〇一六年にようやく完成しました。二〇一七年からは、『全譯三国志』に取りかかるつもりですが、完成までには多くの歳月が掛かることでしょう。また、たとえ全訳が完成したとしても、客観的な事典が書けるほど、すべての問題を解決して、「正しい」三国志の姿を示せ

るとは思いません。

それなら、主観的な「事典」を書けばよいではないか、と踏ん切りがついたのは、『三国政権の構造と「名士」』（二〇〇四年）で扱うことのできなかった倭国を含めた国際関係を『三国志よりみた邪馬台国』（二〇一五年）として、自分なりにまとめることができたためです。主観的であることを貫くために、『三国志事典』は、すべての項目を一人で執筆しました。校正をしながら、一人の三国志学者が理解する「三国志」の姿を自分なりに示すことができたのではないかと考えております。

●渡邊義浩（わたなべ よしひろ）

一九六二年生まれ。筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科史学専攻修了。早稲田大学文学部文学専攻教授。専攻は中国古代思想史。文学博士。著書に『三国志—演義から正史、そして史実へ』（中公新書）、『三国志』の政治と思想（講談社選書メチエ）、『王莽 改革者の孤独』（大修館書店）、『全譯後漢書』（主編、汲古書院）など。映画『レッドクリフ』日本語版監修者。

「三国志」ってそもそも何？

三世紀の中国における三国時代、すなわち魏（曹魏）・蜀（蜀漢）・呉（孫呉）の三国の歴史を記した書物を『三国志』と言います。これは、正史と呼ばれる、中国で正統と認められた歴史書の一つです。蜀の出身の陳寿という人が書き、三国時代の次の西晋の時代に成立しました。

『三国志』は、『魏書』『蜀書』『呉書』の三部に分かれています。本紀（皇帝の年代記）と列伝（臣下の記録）から構成される、紀伝体と呼ばれる形式で記されており、合わせて四百四十人の人物の伝記などからなっています。

一方、『三国志』と聞いて、一般に思い浮かべるのは、小説や漫画、最近では映画やゲームなどでも楽しまれている物語ではないでしょうか。これらの多くは『三国志演義』という小説に基づきます。これは、陳寿の『三国志』から千年の後、明末、清初の羅貫中が書いたものです。

血湧き肉躍る戦いのシーンや、権謀術数渦巻く英雄たちの駆け引き、美女とのラブロマンスなどのエンターテインメント性の高い物語の多くは、『三国志演義』や、そこに至るさまざまな『三国志』物語によって肉付けされ、創作されたものですが、すべてのベースは陳寿の『三国志』です。

孟徳
五徳
(幼)阿瞞(論)武帝
一五五、二二〇
武帝紀魏書

魏の太祖 祖父の曹豊は、桓帝擁立に功績があり、宦官でありながら、多くの人材を抜擢した。無名の曹操を評価し、その理想となる橋玄を推挙した仲高は、その一人である。父は夏侯氏から養子に入ったとき



れる曹高で、太尉に至った。

熹平三（一七四）年、曹操は二十歳で孝廉に推挙となり、洛陽北部尉に任ぜられ、宦官の係累さ

名声を得た。一八四年、黄巾の乱が起こると、**川郡の黄巾を討伐して、**済南国相に昇進した。

中平五（一八八）年、靈帝が新設した西園八校尉に就任したが、翌年、董卓が獻帝を擁立して政ると、陳留郡で挙兵する。一九〇年、反董卓連合に操は、袁紹から行蕃武將軍に推薦された。か

により 許劭の人物評価を受けた曹操は
士グループで袁紹・荀彧・許女

袁紹が董卓と戦わない、
陽の戦いで、

魏の歴史概略

[illegible]

こういふ「乱世の英雄」といふグループにおい
黄巾の乱が「英雄」といふグループにおい
紹が盟主となり、「戦

えた。曹操は、何願も遂げずして死した。その異才に氣うき主張する。其の點の

九〇年
董卓ほうしやくは
いた鮑信ほうしんは
ていた鮑信ほうしんは
を討つことを声高
首都を軍事拠
に滎陽けいようの
弟鮑ほう

③赤壁の戦い

を支援。漢の護持を願う名士に曹操の存在を知らしめた。河北を制圧していく袁紹を見て、曹操は黄巾の乱から出る。一九二年、兗州牧となり、書生を招き、兵士三十万、民百万を帰順させる。この軍事の基盤となった書生は、名士本流の荀彧、荀攸、程昱、郭嘉、許都の多くの名士。

後漢・建安十三年（二〇四）
程普の指揮する
蓋の献策

赤壁の戦い

曹操の率いる數十萬の軍勢に対して、周瑜が黄蓋を装ひ、火船を用いて、この劣勢を覆したのを見て、周瑜と諸葛孔明は「演義」ではあるが、実際の計略は、周瑜の案に依る。周瑜の案に依る。周瑜の案に依る。

[illegible]

艦隊を餉つて、殊弊に、黄蓋が、船に満ち、炎
 か。あるいは、曹操は、年十二月、黄蓋が、船に満ち、炎
 のであらうか。二〇〇、兵士にたけ、黄蓋は、船に満ち、炎
 建安十三年、枯れ草や柴を積み込んだ黄蓋は、船に満ち、炎
 快進船十隻、二里の距離にあおられた船は、船を焼き尽くして上
 艦隊まで、東南の風に、船を焼き尽くして上
 火は、精銳部隊を率いて上

の風になぜか火をかける
と叫ばれ草に火をかける
た柄れ草のように曹操は黄蓋に続いて飛出したのである。
矢のように曹操をも襲う。曹軍中に炎に進んで逃げつたのであ
る。降する。曹公には徐晃、曹操の大敗に終わつたのである。

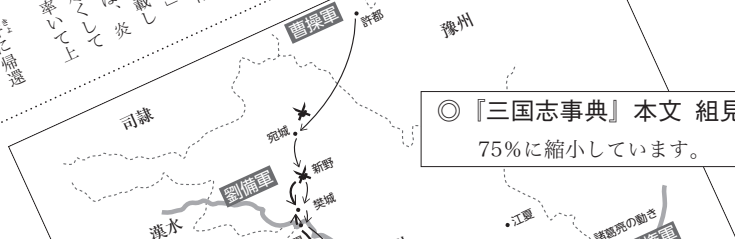
呉

後漢書

この中

蜀 萬人を降伏せしめ、
蜀を安んずる。

◎『三国志事典』本文 組見本
75%に縮小しています。



『三国志』にはロマンがある！

こひなた
小日向えり

(歴史アイドル)



「歴史にはロマンがある」なんて言うとは、月並みに聞こえるかもしれませんが、私は歴史という、人間が織りなす物語の中に、ロマンを感じずにいられません。

特に、人々の思惑が渦巻く群雄割拠の時代はおもしろい。日本では戦国時代、中国だと三国志の時代。その魅力の違いを端的に表現するとしたら、日本は「いかに死ぬか」、中国は「いかに生きるか」だと思います。『葉隠』に「武士道とは死ぬことと見つけたり」という有名な言葉がありますが、滅びゆくものに美しさを見出すのは、日本人の特徴です。

『三国志』は、群雄割拠・権謀術数の時代を「いかに生き抜くか」が学べる、ビジネスマンの必読書ともいわれています。同時に、三つ巴になって争った魏・蜀・呉の君主、曹操も劉備も孫権も、誰ひとりとして天下統一を果たせなかったという、滅びゆくものの「儚さ」もあります。それが日本人の琴線に触れるのでしょう。中国人よ

り日本人のほうが三国志愛が強いのも、興味深いですよ。

「三国志」としておなじみなのは、『三国志演義』ですが、本書『三国志事典』によると、正史の『三国志』以降に生まれた伝説を取り入れながら、長年にわたり加筆修正された結果生まれたそうです。まさに、成長し続ける物語。逸話がいちいちおもしろく、たくさん張られた伏線が、つぎつぎと回収されていくのは、何度読んでも唸ってしまいます。

本書は、娯楽として三国志を楽しむことから、一步、いや三歩くらい進んで、三国志を研究し、その面白さの奥底を堪能したいという方にオススメです。「名場面四十選」は、特に読んでほしい章です。わくわくするのはもちろん、『三国志』の訓点付きの原文があるのが特徴です。

また、「思想と文学」では三国時代において、政治的にも大切な役割を担った文学について知ることができます。曹操は、詩

人としての才能も突出していました。曹操と息子の曹丕と曹植を「三曹」といい、曹操の元に集った優れた文学者（孔融、陳琳、王粲、徐幹、阮瑀、应瑒、劉楨）の七人をあわせて、「建安の七子」と呼びます。本書では、彼らの作品（白文と書き下し文）が多数紹介されています。中でも、私が昔から大好きなのが、曹操の「短歌行」です。

酒に対へば当に歌ふべし

人生幾何ぞ
譬へば朝露の如し……

人生の儚さを詠んだ詩。極めて合理的な冷徹非道に思える曹操の、人間くささを感じます。書き下し文を読んで、漢字の意味を考えると、日本語訳では理解できなかつたニュアンスを感じ取ることができます。

三国志の世界の背景には、奥深い漢文の歴史が広がっています。本書はそれを教えてくれます。三国志通も、三国志初心者も、新たな発見があるに違いありません。

小日向えり 一九八八年、奈良県出身。横浜国立大学卒業。歴ドル（歴史アイドル）の草分け的存在。関ヶ原観光大使。三国志検定一級。著書…『いざ、真田の聖地へ』（主婦と生活社）など。

『三国志事典』には

渡邊義浩の世界知がつまっている

大^{おお}
上^{がみ}
正^{まさ}
美^み

(青山学院大学名誉教授)

十九世紀初頭にはじめての著書を公刊したヘーゲルは、長谷川宏によれば、哲学博士の肩書をあえて「世界知の博士」と記したそうである。専門化が極端に進行した二十一世紀の

学問では「体系として総括するには一個人の手にあまる試み」でしかないのは否定しようもないが、しかしながらわたしが本書を前にして圧倒的に印象づけられるのは、三国志を取り巻く渡邊さんの「世界知」である。三国志をめぐる知識の網羅はもちろんだが、何よりも中国古代の社会構造を共時的に通時的に儒教国家を軸として捉え、三国志の世界再構築という形で渡邊さんの古典学が提示されているからである。

三国志の概観、躍動する群像の解説、厳選された名場面の再現がぬかりなく収められていて、読者は自らの読書体験の多寡に沿って安心して項目を楽しめる、といったよくある事典とそれほど変わりがない組立てともうつる。しかしそのような満足感のずっと彼方に、本書を手にする「啓蒙」の刺激

やよろこびがあり、それが渡邊さんの中国学で再構築された三国志の世界知であると評するのがふさわしい。

ご自身が言うように、渡邊さんの中国学の出発には、多くの三国志愛好家と共有する、いきいきと描かれた英傑像や忘れられない場面の堪能がある。(そのドキドキ体験は名場面を原文とともにとりあげた項目だけでも愛好者の一書となる。)そのおもしろさの成り立ちの歴史的基盤の構造的究明へとのり出す渡邊さんの論理立てが本書のあちこちから手に取るように分かる。三国志世界の再構築の柱としての二、三を示せば、まずは正史『三国志』執筆に見る陳寿の史家としての工夫を凝らした戦略と志である。とりわけ季漢(漢の末)と位置づける蜀出身の彼が、しかもなお魏書に本紀を設けながら同時に、三国の歴史としてたとえば諸葛亮評価などに、魏書に埋没させなかった姿勢を貫くと強調する。

第二点は、後漢の儒教国家の枠組の系列の中で、後には荆

州学に貫かれる名士層と、儒教にとられない猛政や文学の賞揚など、曹操という「超世の傑」の出現の意味とを対置する。その枠組は三国の事実上の終結後、名士の存立基盤の九品中正制と結合した西晋初の五等爵制による儒教国家の衣替えとして蘇り、名士が貴族へと変貌すると捉える。さらには儒教一尊から四学三教への六朝時代を見通す視野を示す。そのように「儒教国家」（「名士」の語とともに渡邊さんのキーワードである）を基軸に、三国志の時空の画期としての意味づけが明確に浮き彫りにされている。これは『三国志』と『三国志演義』の比較において、南宋の朱子の大義名分論によって蜀漢を正統とする歴史小説『三国志演義』の出現を迎える、とするとところにも一貫されており、単なる伝説の系譜に止まらない物語化の思想的由来が語られるのである。

第三点は、曹魏と倭国との関係を問題にし、三世紀の国際的緊張関係の見取り図を提示する。蜀漢に対抗する異民族として親魏倭王の称号を与えたとする、あえてなした東アジア的視野や日本古代の王権を再考する大胆な仮説には、現在の東洋学の学問的有効性を語ろうとする渡邊さんの使命感がうかがえるようだ。渡邊さん一個人の試みは途方もなく驚嘆するしかない世界知であるが、専門を異にする者、それも閉じられた狭い文学の価値を問うだけのわたしのような者からの視野では、上記

のように、臍の緒からのしかとした世界知の獲得への道の筋であることが感知できるのが精一杯であるかも知れない。開かれた知と骨太な構想、そして学問的な志が並々ならぬところであり、どんなふうに学問の触手を逞しく伸ばしていくか、その世界知の実現には、知力体力熱力の大才が基盤になっているのはもちろんであろうが、その肯綮は奈辺にあるか。はじめに戻って、わたしは孔明の義と言ってみたい誘惑に駆られるのである。

「一統を大」にする儒家の真性を体得した渡邊義浩の学的態度には人生的精神が貫かれていると言い切れると思う。真の意味での啓蒙の書であり、そうであるからこそ三国志ファンの垂涎の書として小脇に抱えこまれ続けるであろう。また何かと一言あるであろう専門を同じくする人たち、また専門を異にする者たちにも、それぞれ自身の研究の基本的な立ち位置により意識的にならざるをえないことを強いて止まないものであることは間違いない。

漢詩和訓 七七調のすすめ

横山悠太
(作家)

【和訓】漢字・漢語にその字義に相当する和語を当てて読むこと

(明鏡國語辞典)

楽遊原

ラクユウゲン

向 晩 意 不 適
く れ ゆ く に つ れ た ま ら な く な り
駆 車 登 古 原
く る ま は し ら せ こ の お か の ぼ る
夕 陽 無 限 好
ゆう ひ の な が め な ん と も い え ず
只 是 近 黄 昏
ただ ひ た す ら に た そ が れ て ゆ く

晩 に向 ン と し て 意 適 わ ず
く れ な ん な い か な
車 を 駆 り て 古 原 に 登 る
くる ま か こ げ ん の ぼ
夕 陽 無 限 に 好 し
す き よ う ひ ゐ ん
只 だ 是 れ 黄 昏 に 近 し
た だ こ こ う げ ん に ち か

早発白帝城

ハクテイジヨウをたつ

朝 辞 白 帝 彩 雲 間
わ か れ の こ と ば く も ま に つ げ て
千 里 江 陵 一 日 還
は る ば る と お く ひ と い き に ゆ く
両 岸 猿 声 啼 不 尽
さ る の な く こ え と び か う な か を
輕 舟 已 過 万 重 山
ふ ね は す い す い や ま あ い め け て

朝 に 辞 す 白 帝 彩 雲 の 間
あ し た じ は く て い さ う 間
千 里 の 江 陵 一 日 に し て 還 る
せん り こ う り ょ う い ち じ つ か え
両 岸 の 猿 声 啼 い て 尽 き ざ る に
り ゃ ん え ん せ い な
輕 舟 已 に 過 ぐ 万 重 の 山
け い しゅう ぞ う ば ん じ ょ う や ま

日本人は漢詩を読むとき、それを書き下して読んできました。近代以降は、それを独自に和訳する文学者も現れました。例えば井伏鱒二、佐藤春夫、土岐善麿などがそうです。彼らはそれぞれに、個性的な訳詩をつくりました。今回私は、今までは少し趣向の異なる漢詩の訳し方を「和訓」と称して、皆さんにお勧めしてみたいと思います。冒頭に載せたのは、李商隠の「楽遊原」(上段)と李白の「早発白帝城」(下段)の和訓です。併記の書き下し訳と比較してみてください。アプローチが異なれば、これだけかたちも異なるのです。

私が試みた漢詩の和訓とは、次のような方法をとります。まず、五言詩であれば二と三の間、七言詩であれば四と三の間で意味が切れるので、それらを二字と三字、或いは四字と三字の一まとまりの漢語とみなし、それぞれに七音の和語(わかりやすい日本語)をルビのように当てます。それから、詩の意味が通るように全体を整えます。これだけです。

七七調をお勧めするわけは、詩的リズムを保ちながらも融通の

利く形式だと思っからです。五七調や七五調の方がより日本の詩らしいリズムなのかもしれませんが、五音では自由度が少なく、ハードルが高いです。和訳をひらがな表記にしたのは、原詩の漢字との対比を強調したいがためです。隣り合わせに表記することで、訳を読みながら横目で原詩も同時に確認でき、さらにはその訳の意味をも補ってくれます。例えば李白の絶句の第二句「千里江陵」を「はるばるとおく」と和訓しながら、その遠くにある場所が「江陵」であることも無理なく読み取れます。このようにして、原詩と和訓を切り離さず融合させながら詩を味わうこともできます。

もちろんこの和訓にも欠点があります。翻訳には（とりわけ詩の翻訳には）何かしらの歪みが生じてしまうものです。ただ、漢詩を訳し、また味わう一つの新しい方法として、ご提案した限りです。漢詩を自ら訳すことは、その詩への理解、及び愛着を一層深めてくれます。字数を整え、びつたりな言葉を求めて推敲したり、対句や韻に頭を悩ませたり……。これはまさに、漢詩の作者たちもやっていたことです。もし時間に余裕があれば、授業で生徒の皆さんに漢詩の和訓に挑戦させてみてはいかがでしょうか。思いがけない名訳（或いは迷訳？）が飛び出てくるかもしれません。もしくは、私のように新しい訳のスタイルを考えてみるのも楽しいものです。

最後に二首の律詩の拙訳をご披露いたします。どちらもおなじみの唐詩です。

春望

杜甫

国破山河在	城春草木深	感時花溅泪	恨别鸟惊心	烽火连三月	家书抵万金	白头搔更短	浑欲不勝簪
くにはくずれた	はるのまにちも	いたたまれなく	わかれにやんで	いくさのろし	つまのたよりを	白頭	もうままならぬ
やまかわのこし	きやくさばかり	はなにもなみだ	とりにもびくり	いまだにやまず	なによりのぞむ	掻更短	かんざしさえも

香炉峰下新卜山居

白居易

日高睡足犹慵起	小阁重衾不怕寒	遣爱寺钟欹枕听	香炉峰雪拨帘看	匡廬便是逃名地	司马仍为送老官	心泰身宁是归处	故郷何独在长安
ひるまでねても	かさねぶとんで	おてらのかねに	みねふるゆきに	おもうにこは	いまのしことも	やすらかなれば	ふるさととはた
だるくておきず	ぬくぬくすこす	みみそばだてて	すだれをあげる	かくれのすみか	このみにてきし	それだけでよく	ひとつにあらず

横山悠太（よこやま ゆうた）

一九八一年、岡山県生まれ。『吾輩ハ猫ニナル』で、第五六回群像新人文賞受賞、第一五一回芥川龍之介賞候補。

二〇一七年度センター試験の漢文について

諏訪原 研
(河合塾)

概要

今年度は江戸時代中期の儒者で、正徳の治でも知られる新井白石の随筆『白石先生遺文』からの出題で、随筆はこれで六年連続です。

白石の自著『江閩遺聞』執筆の動機を記したもので、昔は名前さえ知られていなかった江戸が、今では大都会となり、今後大きく変わっていくだろうから、今の江戸のようすを記録し、後世の人々の便に供したいと述べている文章です。

日本漢文の出題は、二〇一二年の追試での頼山陽著『山陽遺稿』がありますが、本試では初めてです。

本文の総字数は一九八字で、昨年より六字増加。設問数は六問で一間減でしたが、マーク数は昨年と同じ八個でした。

設問内容では、問1で語の読みが復活しました。同訓の語を選ぶ問題は一昨年ありましたが、語の読みだけを問うのは二〇〇八年以来、実に九年ぶりです。特筆すべきは、解釈問題がなかったこと。そのような例は過去一九九五年と

二〇〇一の二回だけです。ほかは例年通りの設問構成でした。最初の段落の内容がやや抽象的で文意を取りにくかったことを考えると、昨年よりやや難といったところでしょう。

設問の解説

【問1】波線部ア「蓋」、イ「愈」の読み方の問題。

ア「蓋」の読みとしては、①「なんぞ」(どうして)と⑤「けだし」(たぶん)の二つがありますが、アの前で現在までの事物の変化を述べ、それを根拠に、アの後で今後の変化を予測しているので、類推の意の「けだし」が正解です。河合塾の答案再現データ(以下同じ)では、正答率は57%で、「なんぞ」の選択者が27%いました。イ「愈」は知識の問題で、②の「いよいよ」(ますます)が答えです。正答率は52%で、④「はなはだ」(選んでいる人が22%いました)。

【問2】傍線部(1)「千載之上」、(2)「舟車之所湊」の意味問題。

(1)「千載之上」は、四字熟語「千載一遇」の連想から時間的なことだとわかるので、②「遠い過去」と⑤「はるかな未

問題文

聴^{ケバ}雷^{らい}霆^{てい}於^ニ百里之外^ニ者、如^ク鼓^{スル}盆^ガ望^{マバ}江^カ河^カ
 於^ニ千里之間^ニ者、如^{キハ}縈^{まう}帶^ガ、以^テ其^ノ相^レ去^ル之^ヲ遠^キ
 也。故^ニ居^ニ于^ニ千載之下^ニ而^レ求^{ムル}之^ヲ于^ニ千載^ノ之^ヲ
 上^ニ、以^テ相^レ去^ル之^ヲ遠^キ而^レ不^レ知^ラ有^ル其^ノ變^ル、則^チ猶^ホ刻^{ミテ}
 舟^ニ求^{ムル}劍^ヲ。今^ノ之^ノ所^ハ求^{ムル}、非^ニ往^{ザル}者、所^ニ失^フ、而^レ謂^ハ其^ノ
 刻^ミ在^ニ此^ニ、是^レ所^{ヨリテ}從^{オツ}墜^ト也^ニ。豈^{ヒナ}不^レ惑^{ヒナ}乎^ヤ。

今夫江^レ戸^者世^ノ之^ノ所^ノ稱^{スル}名^都大^{だい}邑^{いふ}、冠^レ蓋^蓋
 之^ノ所^ニ集^{アル}、舟^車之^ノ所^ニ湊^{アツ}、実^ニ為^{タル}天^下之^ノ大^都
 會^ニ也。而^レ其^ノ地^之為^名、訪^之於^古未^之聞^ル。
 豈^ニ非^ズ古^今相^レ去^ル日^遠、而^レ事^物之^ノ變^モ亦^ル在^ニ
 于^其間^ニ耶^や。蓋^ル知^ル後^之於^今、世^ノ之^ノ相^レ去^ル愈^々
 遠^ク、事^ノ之^ノ相^レ變^{コト}愈^々多^ク、求^{ムル}其^ノ所^ニ欲^{スル}聞^{カント}而^レ不^レ可^ル
 得^タ、亦^ホ猶^ホ今^ノ之^ノ於^レ古^ニ也。

吾^ヒ窃^ニ有^ル感^{ズル}焉^ニ。『遺^レ聞^ニ』之^ノ書、所^ニ由^{より}作^ル一^也也。

(新井白石『白石先生遺文』による)

来」に絞れます。あとは「千載之下」との対比に注目して、「上」が過去と未来のどちらなのかを考えます。後文に「今之所求」と「往者所失」の対句が出てくるので、「下」を「今」とすれば、「上」は「往者」つまり過去になります。よって②が正解です。正答率は23%で、全問中最悪でした。誤答では①「高い地位」が32%、⑤も24%ありました。(2)「舟車之所湊」を含む一文は、江戸の繁栄ぶりを肯定的に述べていること、直前の「冠蓋之所集」と対句であることなどに留意すれば、③「水陸の交通の要衝」が正解だとわかります。正答率は65%で、全問中二番目の出来でした。

問3 傍線部Aの内容説明問題。

説明問題ですが、実質は解釈問題で、「相去之遠」(遠く隔たっている)の意味さえわかれば文意をつかむのは簡単です。②の正答率は68%で、全問中一番の出来でした。

問4 傍線部Bの理由説明問題。

「豈不惑乎」(なんと的外れなことではないか)という批判の矛先は、故事「刻舟求劍」の愚かな行為に向けられていて、その行為の具体的内容は、傍線部Bの直前の一文(今之所求(是所從墜也))に述べられています。その文意に近い②と④が残りますが、「今之所求」と「往者所失」の対比関係を踏まえている④が正解です。正答率は64%で、誤答②を選んだ人は20%でした。

【問5】傍線部Cの返り点の付け方と書き下し文の問題。

文中にある「於」を読むのは、「況於_レ三_二乎」（況んや_レに於いてをや）や、「A於_レB」（AのBに於ける）などごく一部の場合に限られ、ふつうは置き字とみなして読みません。この「於」も置き字で、読んでいない②と⑤が残ります。⑤は、「未_レ之」（未だ之かざる）を下の動詞「聞」（聞く）の目的語として読んでいるので間違いです。②の「之」も下の動詞「聞」の目的語として読まれています。否定文で目的語が代名詞の場合、否定詞と動詞の間に目的語が挟まれるので、これは間違いではありません。

【問6】傍線部Dの理由説明問題。

傍線部の直前にある「焉」の指示内容が答えで、それは結局二段落目の内容をまとめたものになります。「後之於今」（後世の人が今を振り返ること）と「今之於古」（今の人が昔を振り返ること）と同様である（猶_二…也_一）という対比関係に着目すると、①と⑤が残りますが、⑤は本文の内容に合致しない記述があるので、①が正解となります。正答率は42%で、全問中二番目の低さでした。

明暗を分けた問題

言うまでもなく最低の出来だった問2の(1)が明暗を分けました。選択者の数が正解を上回った誤答が二つもあったのが、

その何よりの証拠です。もう一つは、正答率が四割そこそかなかった問6です。両問とも対句に留意して解く問題でしたが、その対比関係の存在に気づくかどうか勝敗の分かれ目になりました。

来年度の出題予想と対策

九年ぶりに復活した漢字の読み方の問題は、来年も十分有り得るので、日頃から重要語はチェックしておきましょう。解釈問題はなかったものの、それに近い内容説明問題があったので、設問形式に惑わされず、解釈力はしっかりつけておきましょう。訓読問題では、基本句形をマスターしておくことは当然ですが、今年度のように、置き字は読まないとか、目的語は動詞より後にくるとかいった、ごく基本的なことも問われるということを再認識しておく必要があります。

今年度出題された日本漢文は、ほぼ和習のない漢文でしたから、日本漢文に慣れておくといった対策はとくに必要ありません。ここ六年、随筆からの出題が続いていますが、万全を期すために、史伝、評論、小説といった随筆以外のジャンルの文章にも慣れておく必要があります。なお、漢詩は二〇一〇年を最後に出題されていませんが、それだけ出題の可能性が高いわけで、形式、押韻、対句などの基礎知識や鑑賞力の養成といった漢詩対策も怠らないようにしましょう。

漢字教育の危機的課題——漢字テストの評価を通じて

久保裕之
(立命館大学)

常用漢字の字体・字形について、文化審議会国語分科会は平成二八年二月に「常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）」（以下、「指針」）を作成、公表した。そこには「伝統的な漢字の文化が理解されにくくなり、手書き文字と印刷文字の字形のどちらか一方が正しいとみなされたり、本来は問題にしないでよい漢字の形状における細部の差異が正誤の基準とされたりするといった状況が生じている。……上記のような漢字の字体・字形に関する社会状況の改善を国語施策の課題であると捉え、当指針を作成した」と述べられている。

右のような状況を背景として、本稿は同一の「漢字テスト」の答案に対する複数の教員による採点と「漢字テスト」答案の評価についての教員の意識をアンケートおよびインタビューを通じて分析し、今後のあり方を論じる。

採点評価と基準の不安定さ

「指針」が審議されていた平成二四年から二六年にかけて、筆

者は「漢字テスト」の答案（三三点満点）を作成し、日本と台湾の教員一八八名ずつにその採点を依頼した。答案には日台双方で「標準」とされている字形および日本の「常用漢字表」の「（付）字体についての解説」（以下「字体解説」）の中での明朝体活字の「デザイン差」および「筆写の楷書では、いろいろな書き方があるもの」として明示されているものや、同一字種の台湾「常用国字標準字体」（以下「標準字体」）とを比較し、字体が同じで字形が異なるものを選定した。一部の字種については、「字体解説」の中では明示されていないが、趣旨から応用が可能と判断したものもある。

日本の教員の採点結果は、六点から三三点までの評点差があった（平均二〇・九点）。校種別平均評点では小学校が最も低く（二九・八点）、中、高となるに従って二二・二点、二四・四点と高くなり、小学校と高校との平均評点の差は四・六点ある。答案「保」（右下部が「ホ」）は「字体解説」で示されているものの、全体で65%が誤答と判断された。答案「結」（糸偏の下部が三点）

に至っては82%が誤答と判断され、「楷書ではない」と指摘されている（実は、どちらも楷書）。明朝体活字通りの答案「改」（左下部が「レ」）も37%が誤答との判断である。文化庁「平成二六年度『国語に関する世論調査』の結果について」（問一七）における一般人との意識と比較しても、教員が誤答と判断する割合は高い。（保—一般49%、教員65%／改—一般44%、教員37%）また誤答と判断するポイントもまちまちであり、答案「備」についてはそのポイントが、一二通りもあった。

台湾と日本との評価差

台湾の教員の採点結果は、二点から三三点までの評点差があった（平均二・四・五点）が、校種別平均得点では日本に比べて小学校では三点、中学校では六点ほど高い。中学校では三三点（満点）と評価している者の数が全体の20%を占め、最も多い。

同じ答案の評価が、日本と台湾とでは正反対となるものもある。台湾では答案「保」を誤答としたものは僅か3%であった。また答案「結」を誤答にしたのも7%しかなく、日本のように偏の部分で「糸」にすべきという指摘は皆無であった。答案「改」についての誤答は日台双方とも四割程度であったが、日本では「改」

評価対象 文字	日本 明朝体	日本 教科書体	台湾 標準字体 (楷書)
保	保	保	保
結	結	結	結
改	改	改	改

答案の字体および日本・台湾の各種字体

の「レ」の部分で「レ」にせよと指導するのに対して、台湾では同じ部分を「レ」とするよう指導している。台湾で「漢字テスト」で満点を取るような学生が、日本で同じ字を書くこととされる可能性もある。

正誤評価および指摘内容まで分類した上で、この答案に対して何通りの判断があるのか数えたところ、日台双方とも一八八通りあった。つまり全員が異なる判断と指導をしていると言えるのである。

教師も生徒も被害者

この統計結果をもとに、この採点を行った日本の教員一〇人にインタビューすると共に、それ以外の教員にはアンケートの形で感想を聴取した。

調査結果に対して「採点者による点数のバラつきにショックを受けた。」等全員が驚きを感じていた。それに対する反応では、「自分は随分曖昧な観点で評価していた。」「これまでそれほど漢字教育というものを意識したことがなかったのが本音だ。」という反省や、「小学校での国語の時間は教科書を読ませて漢字ドリルをさせるだけで済ませているのに、字形評価での許容範囲を認めない。中学教師としてはそれが不満だ。」という批判の声があった。

「漢字テスト」の評価基準としては、小学校の教師は情報伝達手段としての文字（＝他の字と見誤らなければよい）ではなく、「きつちりとした（手本通りの、美しい）」字を書くことを基準としているようである。中学校・高校の教師は自己の経験や思い込

みによつて採点する者から、自己の信念により指導はするが減点はないという者まで様々な態度がある。「字体解説」の存在もほとんどの教員が知らず、教科書や漢字ドリルの内容を見て採点している。そして教員自身が子どもの頃からひたすら努力して丸暗記することにより漢字の知識を得ていたので、その方法を児童・生徒にもそのまま伝えていたのである。

多くの教員が漢字の習得が機械的になつていてることを感じている。しかし総じて「点のとりにくい」国語科目の中で漢字分野は唯一確実に出題範囲が決まつていて、とにかく覚えることによつて「点が取れる」という認識を教員も児童・生徒も共に持つている。小・中学校での漢字教育の内容は、そのほとんどが丸暗記のための「作業」であり、それに順応できない児童・生徒を漢字嫌いにさせていることがわかった。

つまり、日本の漢字教育は「テストで×をつけれない」ためのものであり、そして教員はその現状を指摘されて始めて驚き、反省している状態である。現場の教員が漢字に関する政策を知らず、それらの知識を習得する機会が教員養成課程でも教員就職後の研修等においてもほとんどない。よつて漢字教育の指導者が求めている漢字能力や規範意識とは極めて曖昧なものであり、「常用漢字表」や「指針」に示されているような国語政策とは乖離しているだけでなく、教員も児童・生徒も不必要な負担に悩まされているのである。第一、採点者によつて正誤判断が異なるという、テストの信頼性を揺るがす状態が長年放置されてきたことに關して、これまでほとんど問題視されてこなかったことは、不条理である。

今後のあり方

現状を打破する方策として、以下を提案したい。

字形について、「常用漢字表」と「学習指導要領」との間には齟齬および不明瞭なところがある。採点者の中には文字の美醜と正誤とを同一視している者があり、またその基準もまちまちで、字形指導に一貫性がない。「漢字指導通知」(平成二二年^註)にも「漢字の評価については、指導した字形以外の字形であつても、……柔軟に評価すること」とあるものの、具体的な指導要領については全く明記されておらず、その結果ほとんど浸透していない。「指針」と「漢字指導通知」との徹底および現場に対する明確な指導とが求められる。

そして漢字の知識や構造、「常用漢字表」の制定趣旨を教職課程および教職免許更新講習で必修化しなければならない。その中で活字字形と手書き字形との差異等についての知識を得る。技術面では、文字の板書技能の習得にも力を入れる。さらに言えば、漢字教育を国語科と書写科との横断的なものとして、総合的な教育を行うための知識の習得が期待される。

漢字指導のありかたや問題点については、これまでも多くの指摘がなされて来たが、具体的なデータやインタビューに基づき論じられることがほとんどなかった。本稿がこれからの漢字教育・指導のあり方に一石を投じるものであれば、この上ない喜びである。

(注) 常用漢字表の改定に伴う中学校学習指導要領の一部改正等及び小学校、中学校、高等学校等における漢字の指導について(通知)(文部科学省)

瀬川千秋 著 『中国 虫の奇聞録』

(四六判) 並製 二四二頁、
本体一、八〇〇円＋税 大修館書店・あじあブックス



虫の世界には奇妙奇天烈、摩訶不思議なことが多すぎる。人間の想像を超えた習性を持つ虫はあまたあり、新種の発見も終わりがみえない。迷信的な誤解も横行し、「虫がわく」のことは通り、本当に何もないところから現れる虫がいると信じて疑わないお年寄りもまだ多い。これだけ科学が発達した二十一世紀でさえそうなのだから、むかしの人々が理解していた虫のくらしなど、推して知るべしであろう。

歴史の長い中国ともなればなおさらだ。逸話には事欠かない。だがいかんせん、漢字だけの書籍はハードルが高すぎる。

そこにこの本が登場した。中国版「虫遊び」のバイブルともいえる前著『闘蟋——中国のコオロギ文化』に続けて、この分野に該博な知識を有する著者が再び挑んだ。登場するのはセミ、アリ、ホタルなど六種類。身近な虫たちだ。だったら有名な話

しか出てこないかというところ、そうでないから面白い。例えばセミは『詩経』『礼記』だけでも複数の表記があり、地方ごとに独自の呼称があったことをうかがわせる。

裏を返せば、庶民の生活にそれだけ密着していた。仙人になる「羽化登仙」というたとえ、再生を願って死者の口に含ませる「含蟬」の風習を知れば、後世にまで話題を提供してくれたセミに感謝したくなる。そこへきて、セミのあぶり焼き専用のころががあった、なます料理も存在したといわれれば、もはや脱帽しかあるまい。

小さな体に似合わず、アリもなかなかの逸材だ。明代の随筆集『五雜俎』は人間をも上回る優れた生きものとして取り上げ、別の書物にはその超能力を畏怖したとある。東西のアリの大軍を戦わせる芸もあったようだから、ありんこを崇拜する一方で娛樂にしてしまう知恵とたくましさを感じる。

この二面性がなんとも愉快である。そう思っ読むと、農業分野ではかんきつ類の害虫対策にアリを利用していたという。中国最古の植物誌とされる『南方草木状』は、集めたアリを売る商いまで紹介する。セミを仙人と結びつけるかと思えば、アリを生物農薬にする目利きもいた。これだから、中国は侮れない。

さてもと感心したのは、草が腐ってホタルになると誤解されていた期間だ。知識人が昆虫の変態を認めるまでに、実に二千年を要した。しかもその誤情報には日本にも伝わり、七十二候の一つとしていまも生きるとばとしてはおかしくても、季節を区切ることの知識人の抵抗に、賛辞を送らねばならない。

そんなこんなで、著者が探索した虫の話は尽きない、飽きない。いわゆる文系的な内容なのに、生態についての記述・考察は的確だ。虫好き読者はその点でも前著同様に評価し、安心・信頼して読み進む。

これはまさに、「読む標本箱」だ。コレクションしておけば、退屈の虫が寄り付くことはないはずである。

(生物研究家・谷本雄治)

大谷通順 著 『麻雀の誕生』

(四六判) 並製・二五六頁、
本体二二〇〇円＋税 大修館書店



かつて「国民的遊戯」と呼ばれた麻雀は、人気と知名度の高さにも関わらず、その生い立ちには不明の部分が多いらしい。本書の著者によれば「大はゲーム・システムから、小は個々の用語や牌のデザイン」まで、麻雀には様々な「言い伝え」があり、「荒唐無稽、牽強附会の説が少なくない」。しかも「伝説」は淘汰されるどころか、現在はインターネットを通じて「無責任な言説が放たれ放題になっている」というのだ。

本書は「麻雀がいつ、どこで、どのようにして誕生したのか」という「難問」につき、「実証的に答えをさがす試み」である。長年、麻雀に親しみ、中国のゲームと小説の研究に取り組んできた著者にふさわしい挑戦だが、背景には、右のような混乱への強い危機感があつたに相違ない。

それでは著者は、麻雀「誕生」の瞬間をどのように見定めるのか。

著者が最も注目するのは、むろん麻雀の祖国・中国だが、手始めに一九一〇～三〇年代の日本を概観した著者は、まず、一足早くブームを迎え、日本のガイドブックの情報源ともなった一九二〇年代のアメリカに眼を向ける。当時の新聞、雑誌、解説書を通して見えてくるのは、麻雀に対するアメリカ社会の異様な熱狂であり、用具の一新と地位の飛躍的上昇、高貴な由来を主張する新たな伝説の氾濫である。それは麻雀自身の大きな変身とも言うべきものだ。

一方、中国に眼を移した著者がひとときわ綿密に観察するのは、一九世紀末、二〇世紀初頭の上海である。焦点は租界の妓楼。この時期の上海租界には龐大な富と人とが集中、妓楼が賑わい、この環境が「麻雀を世界的ゲームに育てあげる苗床」となる。

探索の主要な材料は『海上花列伝』(一八九二年序)以下、上海の花柳界を舞台

とした通俗小説の一群である。しかし小説は、歴史研究の素材となり得るのか。「近世の戯作的な小説においては、むしろ遊芸を細密に描くことにこそ意味があった。作家はそれによって、みずからその道の『通』たる資格をもっていることを暗示する」。「その道に通じた読者は、作家による細密で、含味の深い描写を目にして、あたかも知音を得たかのような充足感をおぼえ、表現者との一体感にひたるのである」。

著者はこうした洞察のもとに、妓女と客たちの勝負を吟味し、ゲームの正体を見極める。臨場感溢れる分析は、愛好家にとっても心躍る場面に違いない。

補足三点。一、本書が「誕生」を問うのは「わたしたちの知る麻雀」「麻雀に似たゲーム」ではない。両者の関係については「核心」「租界」「起源」を論じた三つの章に詳しい。

二、新たなものをどう受け入れるか。受容のかたち地域個性を見る著者の考察は、麻雀を切り口とする日中米三国の文化論、国民性論の色彩を帯びる。

三、少なからぬ文献が誤謬、剽窃を批判される。著者の位置と方法がそこに見える。

(須藤洋一・中国文学)

村木晃 著

『坊っちゃん』の通信簿

明治の学校・現代の学校』

(四六判・並製・二四八頁・
本体一七〇〇円＋税 大修館書店)

『坊っちゃん』の通信簿』は楽しい本である。楽しいばかりではなく、面白く、多くの蒙を啓いてくれる本である。特に教育、なかならず学校教育に関心をもつ人には、楽しみながら、いろいろな教育問題の整理をしてもらえる本だといえる。

書名から何を想像するか。①小説『坊っちゃん』の評価(評価軸は文学的なものからさまざまある)、②坊っちゃんという人物の評価(教師として、人間として、など)、③坊っちゃんによる、生徒の評価、あるいは広く学校評価、などが、その字面からまづは促されるが、どれも違うようである。②に含まれる、坊っちゃんを授業評価してみることは、ちよつとでてくるが、それは、昨今盛んな教育評価制度の現状を論じていて、坊っちゃんはいわばダシである。

著者の意図は、『坊っちゃん』に登場する学校や先生たちに光を当て、それによつ

て見えてくる事象を、現代の視点から評してみようと考えました。『坊っちゃん』の通信簿、というわけです。〔はじめに〕となる。現代の視点からというと、事象は明治の過去のものと思われがちだが、そうでもない。本書は、むしろ現代の学校教育事象を多岐にわたって取り上げていると受け止めて読んだほうがよい。

論述の例をひとつ挙げてみよう。坊っちゃんが四国に立つとき清との別れの場面で、「生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時ばかりである。」と小説にあるのに注目して(この遠足が学校行事の遠足かどうかは決めにくい)、漱石自身の鎌倉遠足(これは学校行事ではない)の体験とダブらせながら、明治時代の遠足、運動会、修学旅行などに対象を拡大して、現代に及ぶ。小説では、ほとんど無視してもよい「遠足」の語を契

機に、学校行事がどのような理念で行われ、現代にいたっているのかを論じる。この発想・着眼・連想の自由さが本書の魅力を生み出す最大の要因だと思う。思ってもみないようなところに問題をつなげ拡大していくのが、なんとも楽しい。

あのバツタ事件にしても、むかしあつた宿直業務の意味に及び、多くの人が忘れていた「御真影奉護」という、その時代のあの側面を思い出させることになる。さらに、教員の免許制度、教員(授業)評価、教員の資質、多忙、教員相互の人間関係など、このところ問題にされているさまざまなこととがらが、楽しい、ある意味奔放な語り口でとどこおりなく語られていく。筆致はのびのびしている。

山嵐排斥の余波で坊っちゃんの給料が引き上げられる可能性がでてきたりすることなどで、教員の給料がどう決められたか、では現在はどうなのか、とか、教員の敏達迎会で芸者さんと呼んでバカ騒ぎをしたりしたのが、最近さっぱりなくなつたのはなぜだろう、などということについて、この本を読みながら、仲間と話し合つてみるのも面白いかもしれない。

(門倉正二・元東海大学教授)

尼ヶ崎 彬 著 『いきと風流』

——日本人の生き方と生活の美学——

(四六判・並製・二八八頁・
本体二二〇〇円＋税 大修館書店)



九鬼周造『いき』の構造(一九三〇)は長く読み継がれてきた書だが、そこでは、「いき」は、「媚態」「意気地」「諦め」の三要素から成り立っていると書かれている。

この分析は、飲み屋の「いきな女将」にあら、ある程度当てはまる。しかし、上司による「いきな計らい」については、どう見ても、当てはまらない。上司には「媚態」も「諦め」もないだろうからである。九鬼のいう「いき」は、江戸末期に確立した女性の一類型だけを一般化したものだから、多くの要素が漏れてしまっているのである。

尼ヶ崎彬『いきと風流』による分析は、九鬼のものよりもはるかに包括的である。ここでは、「いき」は、派手・艶美・温情などをあえて隠し、他者が評価してくれるのを待つ、というような態度や身なりだと分析されている。自分をよく見せようとする「作為」が表に表れないようにするので

ある。この分析なら、「いきな女将」だけでなく「いきな計らい」も含まれる。本書は九鬼の「いき」論を包括性によって凌駕し、過去のものにしてしまったといえる。

本書の包括性は、歴史的なバースペクティヴから生じている。その視野から見ると、「いき」という美意識は、「雅」対「俗」という長い歴史を持つ対立軸に対して、「いき」対「野暮」という新たな対立軸を提示したものである。

本書はいう。「雅」とはすなわち「風流」のことだったが、「風流」の概念は歴史とともに変化してきた。「風流」とは、古代では、宴の場などで和歌を詠み、恋愛演技ができることだった。それがしだいに花見などの催しで古典の知識と機知を競うものとなっていく。当時の「風流」の実践者は貴族である。中世になると、「風流」の意味が変わり、「豪奢」を指すようになって

た。それと同時に、「豪奢」とは正反対の、隠者風に自然を愛でる「風流」も生まれた。この時代の「風流」の担い手は、貴族階級と新興の武士階級である。いずれにしても、「雅」「風流」は、長らく支配階級が独占し、それ以下の人々は「俗」と蔑まれたのである。

しかし、江戸時代になると、相変わらず被支配階級として「俗」でしかない町民が、表面の「俗」の背後に「いき」という「雅」がある、と主張して美意識の革命を起こした。これだと、人は身分的に「俗」でなければ「いき」になれない。町民は、身分上「いき」にはなれない武士を「野暮」と軽蔑できる視角を獲得することになった。

本書は、日本人のこのような美意識の変遷を、主に和漢の文学の丁寧な分析により立証している。故加藤周一にも、主に和漢の文学を分析しながら日本の文化史・思想史を綴った『日本文学史序説』(一九七五・一九八〇)があるが、本書が述べる美意識の変遷の大部分は見落とされている。本書は、日本の文化史を通観するための必読書として、加藤の書と併せ読まれるべきである。

(鳥越輝昭・神奈川大学教授)

豊富な教材を、見やすく、使いやすく、わかりやすく

古典B 改訂版

古文編・漢文編

古B 339・340 A5判 312ページ／182ページ

《古文編》
93 教材

《漢文編》
66 教材

計7本！
使える
コラム
充実の
図録・資料
計36ページ！

新編な
工夫満載！
わかりやすい
教材化
見やすい
レイアウト
見開き構成！

+

×

=



入試を見据えた効率的な2年間履修に

精選古典B

改訂版

古B 341 A5判 392ページ

わかるやすい
教材化

図録
資料
46ページ

漢文
66
教材

バランスの
とれた
古典Bの
スタンダード

古文
66
教材

使える
コラム
11本

見やすい
レイアウト



古典がもっと身近になる、新しい古典教科書

新編古典B 改訂版

古B 342 A5判 366ページ

こんな教科書で古典の授業がしてみたかった！

古典の世界が目の前に立ち上がる！

好評の教科書が、改訂でさらに魅力アップ！

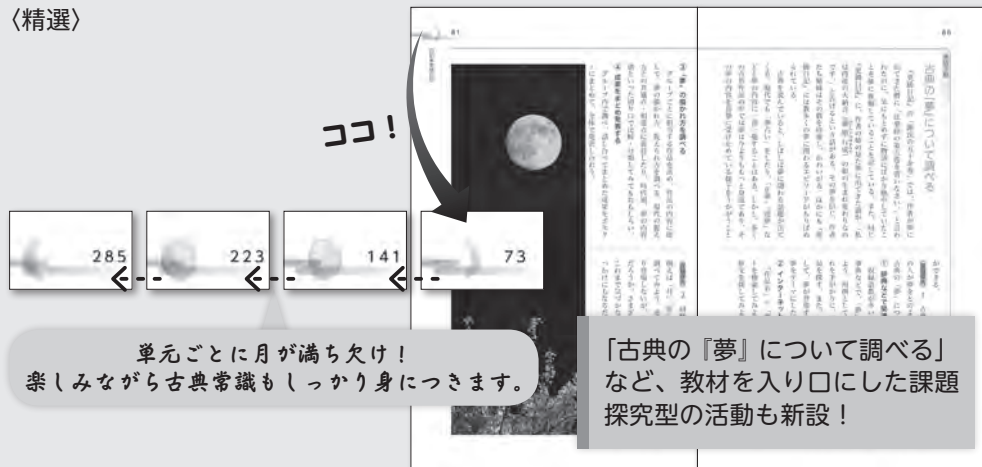
百人一首も
美しい折込で
全首収録！



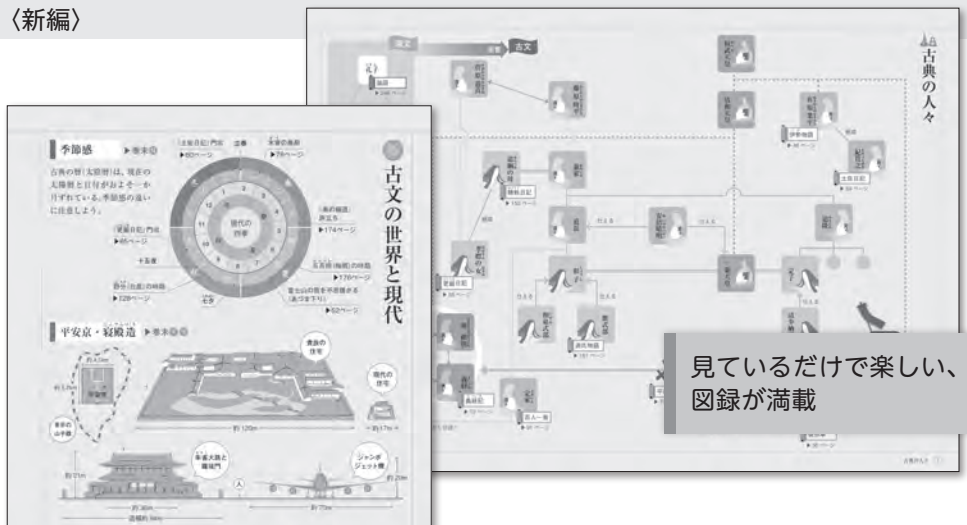
〈分冊〉



〈精選〉



〈新編〉



『古典 B 改訂版 漢文編』 『精選古典 B 改訂版』

漢文の影 (2) 漢文と日本人

階級がわが国に伝来したのは四世紀頃
 といわれている。それ以来、漢文とその
 解説による文体は、長い間、思想や感情
 を表現する時の公的な手段であり続けた。
 私たちの言語を豊かにし、文化を発展さ
 せるうえで大きな役割を果たしてきたの
 である。

平安時代になると、南の文化の影響を受け、**文選**や**白氏文集**が読まれ、漢文学は隆盛を極めた。菅原道真他の漢詩人も登場し、優れた作品を残している。江戸時代に入ると、幕府は漢文学を奨励した。漢文を教養の基礎とする学者や文人の活躍には目覚ましいものがあり、

「人虎伝」と「山月記」

日本近代文学の名作として多くの読者を魅了し続けた『浮城物語』の『山鹿記』は中国の全盛期に作られた小説『人民記』が基になっている。この『原作』『人民記』は清代に生れた伝説小説と称されるものであって、伝奇のものと特に人が虎に化身する中世を伝えている。『浮城物語』のそれにして『山鹿記』は『山鹿記』において、人が虎に化身するといふ中世の新解釈は原作『人民記』の思想的な背景をもとの見事に引き出すことにより、新たな文脈で再考されている。ではそれどのような形で再考されているのだろうか。

[illegible]

☆ それぞれの持ち味

電影長度：108分，國粵語雙聲道

て機軸を伝える物語展開の巧みさにお
しろみがある。そして「月日記」は近代
小説として人間が内面に抱える苦悩を描
くところに見どころがある。両書それぞ
れの持ち味をよく心得て読み味わうこと
が求められるのである。

漱石には漢詩の他に『木犀歌』という

西文体の作品がある。二三歳の夏休み
男総に旅行した時の紀行文である。
その中に、船旅の際、帽子を風で飛ば
された次のような逸話が載っている。
旗立も日、大風で波は荒く、皆起つ
こともできない程だったのに、三人の女

性がはつたりと誤笑してゐた。漱石は是
りの傍に好いところを見せようと、手す
りの傍に正座し、やがてでようとうと、
ちがう。そのとたん、舟が傾いた。
「余歩を失ひて傾き既る。既るる時
西風、寒風、愈々してつむじ風のよに
吹き、帆を奪て去る。顧みれば船はさ
落船、翻船として疎疾、しよき」の中心
流すを見るのみ、舟人皆手を拍ちて
いに笑ふ、三女どもは黙然、笑ふ様子
にて余の心状、無様な状態、を確
がして、之が為て招恨（おこづ）を醸
たり。」

き漱石の姿が目に見えかじさうである

『本質録』を読んだ子規は、春末に柳井を漢文で記し、「吾兄のことき者は千万年にして一人のみ」と称賛した。

明治の文豪たちの文字は、こうした豊かな漢文の素養のうえに大輪の花を開いたのである。

余以八月七日途經大觀舟中人概言
莊伯允能避有二十五年甲辰樓上焚
舟爲余冠絕懷舊懷下舟中聞者無不
倚欄立而歎覽觀水相聞之快臨流
自適得此寓此舟亦都妙絕矣余先
聞沈洪時爲戚在王爺門下朝朝暮
暮談談談談中談及沈洪十年後官相

「真録」上記引用部分。漱石の自筆。上部の朱の書き入れは、子規に
あるもの。

漢籍の伝来から夏目漱石と正岡子規まで、日本人と漢文の歴史を概観します。漱石自筆の『木屑録』（子規の朱の書き入れ付き）の図版を掲載しました。（『古典B改訂版 漢文編I』）

中島敦の「山月記」の元になった、中唐の伝奇小説「人虎伝」を収録しました。両者の関係を、コラムでわかりやすく解説しています。

(『古典B改訂版 漢文編』『精選古典B』)

迫力満点の「三国志」単元

『新編古典 B 改訂版』

三国志への招待

後漢王朝の末期、各地に反乱が起り群雄が割拠した。この時にまず群雄を覆ったのは、魏の曹操である。彼は中原の地、黄河中流から下流の中国中央部一に跨って中国全土の支配を企てていた。これに反抗して、蜀の地（現在の四川省を中心とする地域）に拠り漢正統を名乗った蜀漢の劉備と、江南の地に拠った呉の孫権とは互いに譲らず、終はまさしく三国の鼎立する形勢となつた。

この中であつて、劉備に仕えて天下三分の計をたてた「諸葛亮」は、その多くをこの「三国志」が記録して「三国時代」を知った。その関亡の歴史の中からは、なかなか深い成り立ちや成金が数多く生じている。

魏
曹操 (155-211) 三国魏の初代の君主。字は孟徳。
曹植 (187-226) 曹操の三子。魏の太子。字は子建。
曹芳 (197-239) 曹操の孫。字は仲子。

蜀
劉備 (161-223) 三国蜀の初代の君主。字は玄德。
劉禪 (181-234) 劉備の次子。字は公孫。蜀の太子。字は公孫。

呉
孫権 (182-252) 三国呉の初代君主。字は仲謀。



曹操



劉備

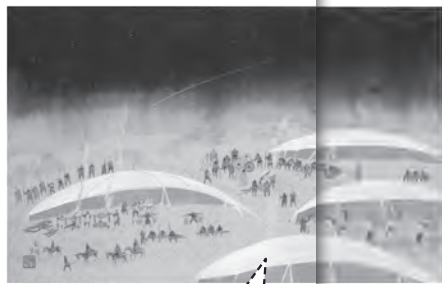


孫権

冒頭コラム「三国志への招待」

三国志の世界が、目で見てわかる工夫がいっぱいです。

- ・教科書に登場する人物の国別の紹介
- ・人物画像とその勢力のおよぶ範囲がわかる地図
- ・中国史全体の流れの中での三国時代の位置づけがわかる年表



本文には、安野光雅筆の『繪本 三国志』より、迫力のある図版を掲載しました。

諸葛亮の死
 諸葛亮、挑司馬懿、懿不出、乃遣以巾幘婦人之服、亮使者至、懿軍懿問其寢食及事煩簡、而不及戎事使者曰、

◆古典の窓「出師の表」

コラムで背景知識を解説することにより、漢文で読んだ内容を、さらに深く理解できるようにしました。

（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）（十一）（十二）（十三）（十四）（十五）（十六）（十七）（十八）（十九）（二十）（二十一）（二十二）（二十三）（二十四）（二十五）（二十六）（二十七）（二十八）（二十九）（三十）（三十一）（三十二）（三十三）（三十四）（三十五）（三十六）（三十七）（三十八）（三十九）（四十）（四十一）（四十二）（四十三）（四十四）（四十五）（四十六）（四十七）（四十八）（四十九）（五十）（五十一）（五十二）（五十三）（五十四）（五十五）（五十六）（五十七）（五十八）（五十九）（六十）（六十一）（六十二）（六十三）（六十四）（六十五）（六十六）（六十七）（六十八）（六十九）（七十）（七十一）（七十二）（七十三）（七十四）（七十五）（七十六）（七十七）（七十八）（七十九）（八十）（八十一）（八十二）（八十三）（八十四）（八十五）（八十六）（八十七）（八十八）（八十九）（九十）（九十一）（九十二）（九十三）（九十四）（九十五）（九十六）（九十七）（九十八）（九十九）（一百）

平成30年度用

大修館「古典B」のご案内

古典B 改訂版

古文編 漢文編

【古B 399・340】

A5判・312ページ／182ページ

文学史を網羅する豊富な教材を、
見やすく、使いやすく、
そしてわかりやすく。

装丁メモ

挿画は江戸中期の画家・伊藤若冲の「牡丹
百合図」(古文編)、「猿猴摘桃図」(漢文編)。
じやくちゆう
えんこうてきとう

-->36、37、38ページ



精選 古典B 改訂版

【古B 341】 A5判・392ページ

一冊本「古典B」のスタンダード
入試を見据えた
効率的な2年間履修が可能。

装丁メモ

吉岡幸雄『「源氏物語」の色事典』より、
山吹の襲と菊の襲を組み合わせました。

-->36、37、38ページ



新編 古典B 改訂版

【古B 342】 A5判・366ページ

古典がもっと身近になる。
古典と現代がリンクする。
新時代対応の古典教科書。

装丁メモ

やわらかな若草色の春景色のイラストが、
生徒を古典の世界に誘います。

-->36、37、39ページ

